

水 城

昭和51・52・53年度の発掘調査概報と
史跡環境整備事業実施概要

1979

福岡県教育委員会

『水 城』 正 誤 表

頁	行	誤	正
1	(表 7)	(第 7 次調査の調査年次)	51. 6. 3 ～ 6. 10
2	11	S A011	S A001
19	22	Ⅲ 6 □型式	Ⅲ 6 □型式
21	16	凸凹に均し	凹凸に均し
22	8	上水路で	土水路で
〃	〃	選り	進り
〃	19	水城交差点との	水城交差点傍の
第 13 図		S E 6 0 5	S E 0 6 5
第 18 図		1 ～ 4 は右に訂正	

発刊のことば

この概報は、特別史跡水城跡の環境整備及び保存の基礎資料を得るために、福岡県教育委員会が国庫補助を受けて実施した発掘調査の概要と、本年度に実施した環境整備の概要であります。

発掘調査及び環境整備にあたっては、地元の方々に終始御協力いただきましたことに対し、深い感謝の意を表します。

昭和54年3月31日

福岡県教育委員会

教 育 長 浦 山 太 郎

例 言

- 1 本報告は福岡県教育委員会による特別史跡水城跡の史跡地環境整備事業に先立って実施した昭和51～53年度の発掘調査の記録である。
- 2 本調査の実際は福岡県教育委員会の委託を受けて九州歴史資料館が担当した。
- 3 本調査の関係者は下記の通りである。

調査主体者 福岡県教育委員会管理部文化課

藤井 功・川崎隆夫・武久耕作・二村能史・宮本貞行・芳沢 要・豊福金蔵・磯村幸男

調査担当者 九州歴史資料館

石松好雄・高倉洋彰・横田賢次郎・森田 勉・高橋 章

調査補助員

山本信夫・沢田康夫・真玉秀樹

なお、発掘調査にあたっては地元大字水城・大字国分在住の皆様に多大の御協力を得た。

- 4 本報告から既報告分を含め水城跡についての発掘調査に対して調査次数を与え、同時に水城大堤をS A 001としたほか一連の遺構番号を付している。
- 5 本報告では水城築堤の北側（福岡側）を外側、南側（太宰府側）を内側として表現している。
- 6 本報告の執筆・編集は高倉・横田・森田・高橋が分担したが、九州歴史資料館倉住靖彦氏に一部執筆をお願いした。写真図版は九州歴史資料館の石丸洋氏による。遺物の整理にあたっては伊藤かの子・井上トシ子さんの御協力をえた。
- 7 第V章の執筆・図版作成は芳沢要による。

目 次

発刊のことば

I 水城跡の調査経過	1
II 調査の記録	2
1 第6次調査	2
2 第7次調査	6
3 第8次調査	7
4 第9次調査	10
5 第10次調査	11
III 水城の門礎について	15
IV 水城出土の弥生時代遺物	17
V 環境整備事業実施概要	20

挿 図 目 次

第1図 水城跡発掘調査地域図	折り込み
第2図 第6次調査遺構配置図	折り込み
第3図 第6次調査土層実測図	折り込み
第4図 S D 055 出土土器・陶磁器実測図	4
第5図 第6次調査出土瓦拓影	5
第6図 第7次調査遺構配置図	6
第7図 第7次調査土層実測図	6
第8図 第8次調査第1地点地形図	7
第9図 木樋 S X 050 遺構実測図	折り込み
第10図 第9次調査遺構配置図	10

第11図	第9次調査土層説明図	10
第12図	S E 065 実測図	11
第13図	第10次調査遺構配置図	折り込み
第14図	S E 065 出土土器実測図	12
第15図	水城門礎実測図(1)	15
第16図	〃 (2)	16
第17図	弥生土器実測図	17
第18図	弥生時代遺物実測図	18
第19図	水城環境整備実施状況説明図	折り込み

図 版 目 次

図版 1	第6次調査地全景
図版 2	溝 S D 055
図版 3	第8次調査地第2地点の全景（木樋 S X 050 取水口）
図版 4	木樋 S X 050 縦樋・横樋の細部
図版 5	第10次調査地全景
図版 6	（右）第10次調査 S E 065 出土土器・（左）水城出土の弥生時代遺物
図版 7	水城跡の環境整備
図版 8	〃



第1図 水城跡発掘調査地域図 (1/5000)

I 水城跡の調査経過

水城は大野城・基肄城および周辺の山地の尾根とたくみに連結して堅固な羅城をなし、平地における大宰府防衛の重要施設として知られる。現在6カ所にその築造が知られているが、その主たる築堤は大宰府の北口を扼する水城大堤にみられる。『日本書紀』天智天皇3年(664)条に「是歳、対馬嶋・壱岐嶋・筑紫国等に、防と烽とを置き、又筑紫に大堤を築きて水を貯へしむ。名づけて水城と曰ふ」とあり、築造年次の明確な遺構である。

水城大堤に関する最初の考古学的知見は元禄12年(1699)の木樋の発見で、続いて天保5年(1834)頃に再び木樋が発見されている。大正3年(1914)には鹿児島本線の拡張にともなう築堤切断時に土塁断面の観察がなされた。こうして昭和5年(1930)の長沼賢海・鏡山猛両氏による最初の発掘調査の実施へのレールが敷かれていった。この折には現国道3号線の開設にともなう、土塁に直交する木樋遺構の調査がなされ、その後の考古学研究への基礎資料が提供された。

水城大堤の本格的調査は昭和45年(1970)年にはじまる。その後の調査は下表にまとめているが、第5・6次調査による外堀・内堀遺構の可能性の把握など、その成果は増大してきた。当初の道路開設にともなう事前調査から、今日では史跡地環境整備のための事前調査へと調査の内容にも変化がみられ、この歴史上の重要遺構の保存体制の確立への動きを強めてきている。

	調査年次	調査の原因	調査の目的	調査箇所	報告
1	45	福岡南バイパス建設	欠堤部東端の遺構	福岡県筑紫郡太宰府町(以下略) 大字水城字古門畑122-4, 123-6	1
2	47	"	"	" 123-6	2
3	47.6 末～9 初	九州縦貫自動車道建設	東堤部西端の遺構	大字水城字八反田121・122	3
4	48	"	欠堤部石敷遺構	大字国分字川原261-1	3
5	50. 4.24～6.15	環境整備	東堤部外堀遺構 " 木樋遺構	大字水城字八反田66他 大字国分字衣掛224-1	4
6	51. 1.19～4. 2	造成予定	" 内堀遺構	" 236	本文
7		住宅建築	西堤部内側の遺構	大字吉松字松本193-5	本文
8	52. 7. 8～7.23	環境整備	東堤部取り付け部の遺構 " 木樋遺構	大字国分字衣掛191-1, 221-3	本文
9	53. 4.17～4.22	住宅建築	西堤部取り付け部の遺構	大字吉松字星ヶ浦475-4	本文
10	53.12.1～54.1.31	環境整備	東堤部内堀遺構の有無	大字国分字衣掛221-1	本文

- 1 森田勉「水城地区(水城跡)の調査」(福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告1)1970
- 2 浜田信也「水城地区(水城跡)の調査」(福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告2)1975
- 3 亀井明德編『福岡県筑紫郡太宰府町水城跡の調査』(九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXVI)1978
- 4 高橋章編『水城』(昭和50年度発掘調査報告)1976

II 調査の記録

1 第6次調査

水城跡の発掘調査は、これまで建設工事に伴う事前調査が多く、欠堤部および東堤部外側の発掘調査が主であった。今回の調査は築堤の内側をその対象とし、内側台状部および南側平坦地の遺構の存否の確認を目的とした。調査地は、国道3号線より西方へ約180mのところ positioningし、東堤西端部内側の水田地である。地番は筑紫郡太宰府町大字国分字衣掛256である。調査対象地1302㎡のうち440㎡について発掘調査を行った。

調査の結果、内側台状部は版築していることが認められ、さらに築堤に沿って東西方向の溝状遺構を検出した。調査は昭和51年1月19日に開始し4月2日に終了した。

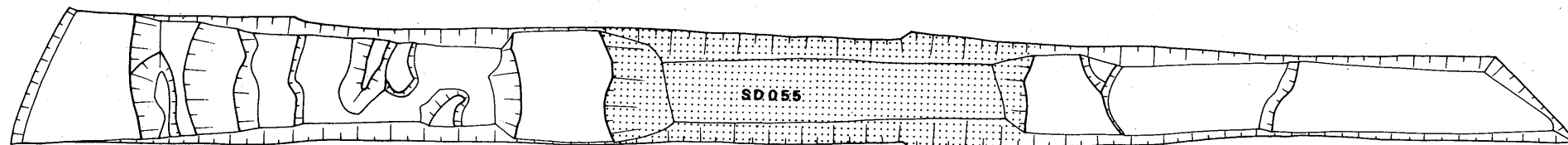
検出遺構

SA011（築堤内側台状部） 水田地から約2mほど立上った台状部に幅2.5m、長さ7mの南北トレンチを設定した。その断面を観察すると、現地表下約0.8mで積土の上面に達する。積土は幅約15cmの暗紫粘土、淡黒灰色粘土層が約50cmの間隔をもって3層認められ、この粘土層の間に花崗岩バイラン土、褐色土を互層に版築している。上面積土から約1.95mで積土最下面に達し、茶褐砂質土から積土をしていることが観察できる。

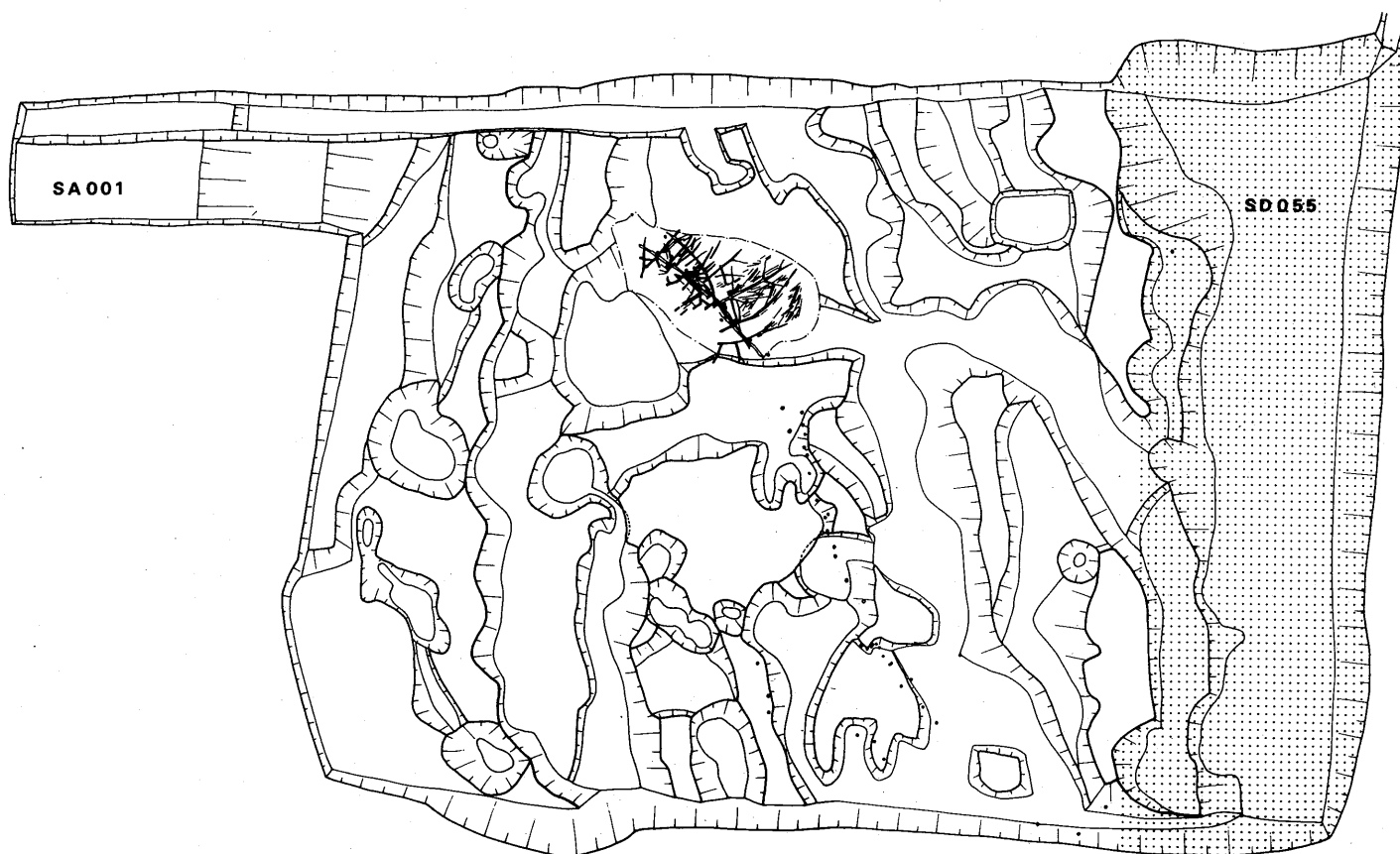
これまでの築堤の積土については、従来中山平次郎博士が鹿児島本線の拡張工事の際にその断面を観察し、土塁を2段の築成と考えていた。そして第3・5次調査で外側台状部の断面を知ることができた。そこで3次と6次調査の積土最下面の高さを比較してみると、6次は24.45m、3次は22.80mで内側から外側にかけて1.65mの高低差が生じる。内・外台状部の幅は約72mあり、1.65mの高さを勘案すると約4度で内側から外側に傾斜している。したがって、ほぼ平坦に近い面に積土しているといえよう。又積土の上端部では内側で26.50m、外側で24.50mをはかり、約2mの高低差をみることができる。

SD055（溝状遺構） 発掘調査地の南端に築堤と平行する東西方向の溝状遺構を長さ約26m検出した。溝は上端で幅約10m、下端で約8m、最深部で約1.5mである。溝底部は東側と西側で約17cmの高低差があり、東が若干高い。つまり御笠川方向に傾斜していることがわかる。溝埋土には大きく2回の堆積状況がみられるが溝全域で認められるわけではなく、流れによって堆積が多少出入りしている。新期と考えられる層は茶褐荒砂、灰砂などが堆積し、旧期は暗灰粘質土、黒灰粘質土等に有機質を含む層が認められる。出土遺物は各層に混って若干出土した。

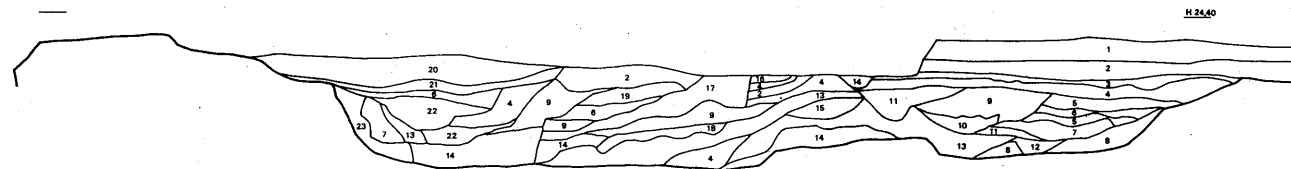
この他、内側台状部とSD055との間に、東から西にかけて自然流路を検出した。その幅は中央部で約12cmで西方にしたがい広がっている。流路面は凹凸が激しく、灰砂・茶褐荒砂の



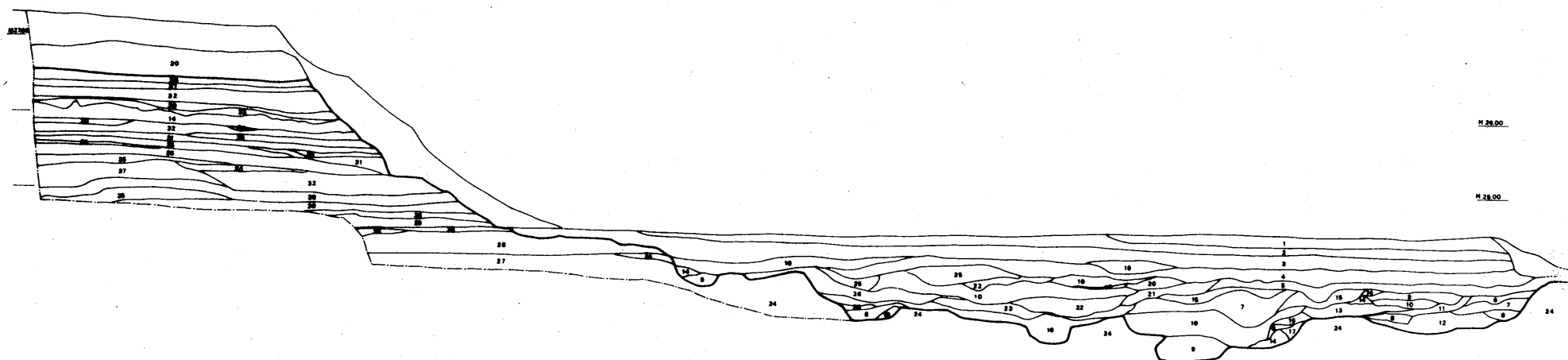
Aトレンチ



第2図 第6次調査遺構配置図



- | | | | |
|----------------|---------------------|--------------------|--------------|
| ① 表土 | ⑦ 黒灰色粘質土 (やや青味をおびる) | ⑬ 黒灰色粘質土 (有機物混) | ⑲ 黒色土 |
| ② 床土 (暗灰色土) | ⑧ 黒灰色砂質土 | ⑭ 灰色荒砂土 | ⑳ 茶褐色荒砂土 |
| ③ 暗灰色砂質土 (砂多混) | ⑨ 淡黒灰色砂質土 | ⑮ 灰白色細砂土 | ㉑ 茶白色砂土 (細砂) |
| ④ 暗灰色細砂質土 | ⑩ 暗灰白色砂土 | ⑯ 暗褐色砂土 | ㉒ 暗茶灰色荒砂土 |
| ⑤ 灰色砂土 | ⑪ 暗灰色砂土 | ⑰ 茶灰色砂土 (礫混) | ㉓ 青灰色砂質土 |
| ⑥ 暗灰色粘質土 | ⑫ 淡茶灰色砂土 | ⑱ 灰褐色砂土 (青灰粘ブロック混) | |



- | | | | | |
|------------------|------------------|-----------|-----------------------|--------------------------|
| ① 床土 | ⑨ 灰色荒砂 | ⑰ 暗青灰色粘質土 | ㉓ 茶褐色土 | ㉓ 淡茶濁色バイラン土 |
| ② 灰褐色土 | ⑩ 茶褐色荒砂 | ⑱ 暗黄褐色砂質土 | ㉔ 暗茶灰色粘土 | ㉔ 淡暗褐色粘質バイラン土 (やや紫色をおびる) |
| ③ 黄褐色土 | ⑪ 青灰色粘質土 | ⑲ 茶褐色粘土 | ㉕ 黒灰色粘土 | ㉕ 茶褐色バイラン土 |
| ④ 茶灰色砂質土 | ⑫ 灰褐色荒砂 | ⑳ 暗茶灰色土 | ㉖ 茶褐色砂質土 | ㉖ 黒灰色粘質土 (やや砂が混る) |
| ⑤ 黄灰色粘質土 | ⑬ 灰黒色粘質土 | ㉑ 淡茶灰色砂質土 | ㉗ 黄色粘質土 (ブロック状に混りがある) | ㉗ 灰白色バイラン土 (やや青味をおびる) |
| ⑥ 灰色砂質土 | ⑭ 暗紫色粘土 | ㉒ 淡茶褐色砂 | ㉘ 褐色土 | ㉘ 暗茶白色バイラン土 |
| ⑦ 白色砂 (やや灰色をおびる) | ⑮ 淡灰黒色粘質土 (⑬と類似) | ㉓ 灰黒色粘質砂土 | ㉙ 淡黄白色バイラン土 | ㉙ 淡黒灰色粘質土 |
| ⑧ 黒色粘質土 | ⑯ 灰白色細砂 | ㉔ 青灰色粘土 | ㉚ 淡茶白色バイラン土 | |

第3図 第6次調査(上)Aトレンチ北東壁土層図・(下)北東壁土層図

堆積が厚い。この流路の中央部にほぼ南北方向（流路に対し対角線）に杭列およびシガラミを検出した。シガラミは茶褐荒砂の上に構築されており、面を西側にそろえている。出土遺物は弥生時代から近世のものまでが砂層に混って出土しており、時期的に新しい後世の流れであろう。

出土遺物

調査対象地域全体から土器、陶磁器、瓦類がさほど多くはなかったが出土した。このうち S D 055 出土の土器、陶磁器と発掘区全体から少量ではあるが出土した瓦について報告する。

S D 055 出土土器・陶磁器（第 4 図）

この溝から出土したものは古墳時代から近世・近代までであるが、そのうち奈良・平安時代のものがもっとも多い。

須恵器

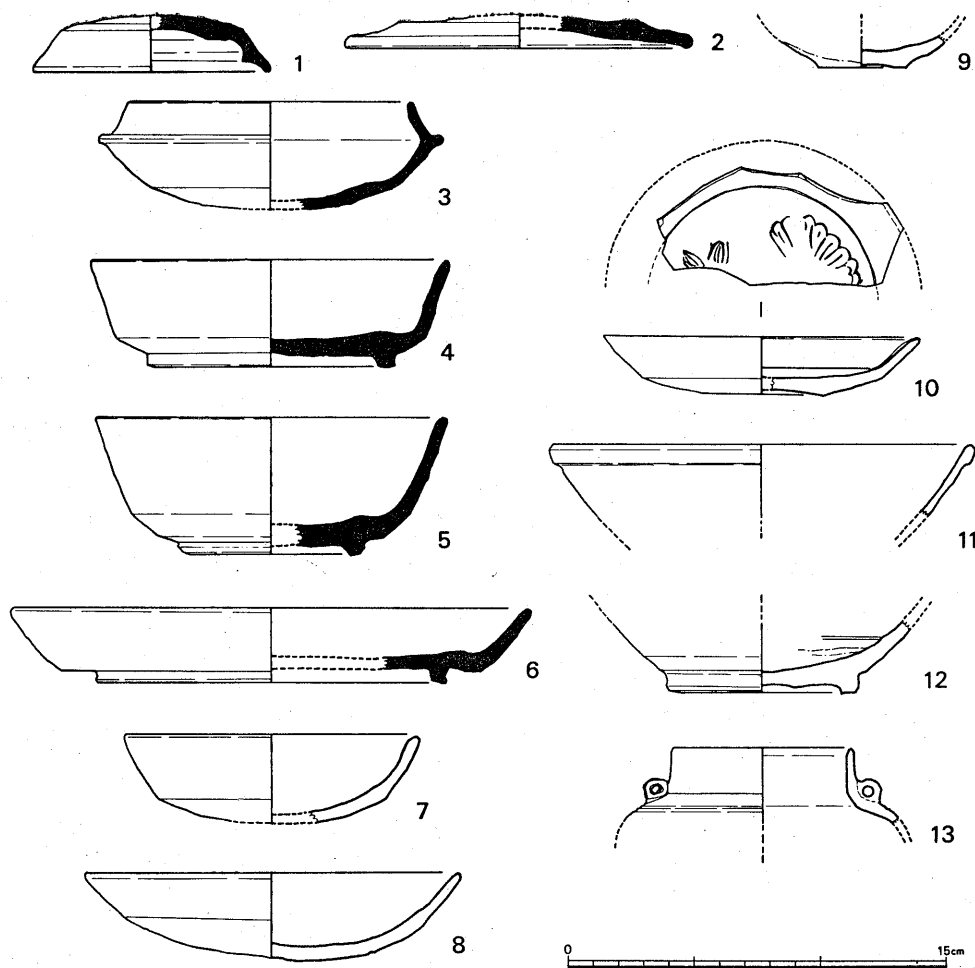
杯蓋（1・2） 1 は返りを有する蓋で、器面全体が摩滅のため調整については定かではないが、天井部周辺のみを回転ヘラ削りしているようである。口径 9.3cm、器高 2.2cm を測る。暗灰色を呈し焼成は堅緻であるが、器面はローリングのため胎土中の砂粒が目立つ。2 は身受けの部分が退化したもので、天井部を回転ヘラ削りしている。口径は 13.7cm、復原器高 1.3cm を測る。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土中には砂粒は少ない。

杯身（3～5） 3 は蓋受けの立ち上りを有するもので、底部外面は回転ヘラ削りを行っている。立ち上りの基部と体部との境の内側は若干稜線が入り、立ち上り高は 1.4cm と比較的高い。口径 11.2cm、復原器高 4.2cm を測る。焼成は堅緻で青灰色を呈する。胎土中の砂粒は少ない。4・5 は断面四角形の高台を有するものである。調整はヨコナデおよびナデのみで、ヘラ削り等は施されていない。4 は口径 14.2cm、器高 4.2cm、高台径 9.8cm、5 は口径 13.8cm、器高 5.4cm、高台径 7.3cm を測る。両者ともに胎土中の砂粒は少なく、焼成は堅緻で青灰色を呈する。

高台付皿（6） 口径 20.4cm を測る皿に断面四角形の高台を貼付したものである。底部は高台貼付時のナデと風化のため、ヘラ削りの有無については明らかではないが、体部と底部との境は明瞭であることから、再調整を行っているものと考えられる。器高 2.9cm、高台径 13.8cm を測る。風化のため器面が荒れて、砂粒が浮き出ているが、胎土は比較的精良である。焼成は堅緻で暗灰色を呈する。

土師器

丸底の杯（7・8） 7 は口径 11.7cm、器高 3.5cm を測る丸底の杯であるが、器面の荒れが著しく、調整は知れない。8 は内面をヘラミガキし、底部を押し出すことにより丸底とした典型的な丸底の杯で、口径 14.9cm、器高 3.4cm を測る。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。焼成は良好で乳白色を呈する。



第4図 S D055出土土器・陶磁器実測図

白磁

皿（9・10） 9は、胎土が若干粗く黄色味を帯びたものである。10は口径12.5cm，器高2.3cm，底径4.8cmを測り，灰色の釉を底部外面を除いて施され，内面見込み部分に花文がスタンプされたⅧ-2・b類である。胎土は灰色味のある白色を呈し，釉は内外面ともに貫入がみられる。
(註1)

碗（11） 口縁部を丸く肥厚させ，体部は丸味を有するⅡ-1類のものである。このⅡ類は通常細かい貫入が多い黄色の釉を特徴とするが，本例は焼成が非常に良く，胎土は灰白色を呈し，灰白色の釉が施されている。この胎土，釉調の特徴はⅢ・Ⅳ類に近くあるいはⅡ類ではないかもしれない。しかし，Ⅱ類でもこのような焼成の良いものも時々出土することから，一応

Ⅱ類として報告する。小片からの復原であるが、口径は約16.7cmを測る。

青磁

碗(12) 越州窯系の青磁Ⅰ—Ⅱ類で、高台置付以外は全面に黄緑色の釉が施されている。内面体部下位に一条の沈線が見られるが、小片であるので文様になるのか、体部に一条めぐるのが明らかでない。見込み部分に重ね焼きの目跡がある。

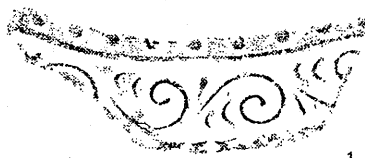
黄緑釉陶器

壺(13) 縦耳のついた壺の小片で、粘土紐を1回転させたものを2本貼付し一つの耳としている。耳の直下の肩部に2条の沈線がめぐらされている。残存部はヨコナデ調整で、黄緑色の釉が施されている。越州窯系のものと考えられる。

瓦類(第5図)

今回出土した瓦類は軒丸瓦1、軒平瓦2、文瓦「平井」銘1、無文埴4、鬼瓦片4と若干の丸・平瓦片である。

1は鴻臚館式で、中心飾から左右に4回反転する均正唐草文である。2は筑前国分寺で類例が出土しており、左右に3回反転する均正唐草文である。これらは流路から出土したものであるが、他にも筑前国分寺跡出土例と同類の瓦が多い点を注目しておきたい。



小結

第5図 第6次調査出土瓦拓影(1/3)

今回の調査の結果から、内側に溝状遺構が検出され新たな知見が提示された。SD055はSA001築堤中心部より溝中心部まで約64mを測ることができる。そして溝を東方に延長すると、昭和5年に検出された木樋取水口のほぼ中央部にあたる。築堤と取水口の距離は約63mあり、溝との距離にほぼ近い数値を示している。このことから溝と木樋取水口との関連性が考えられた。しかし東堤の内側台状部は、中央部で若干張出しがみられ、SD055がSA001と平行に延びるとするならば、その張出しに突当ることになる。よって疑問とするところは多く、今後の調査が望まれる。

又SD055から出土した遺物は、溝の流れの関係上弥生から近世までの遺物が出土し、層位的に把握することは難しく、まして溝の時期を推定するには困難である。ただ全体的な出土遺物のうち奈良から平安時代の須恵器・瓦が多いことを注視しておきたい。

註1 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4) 1978の分類による。

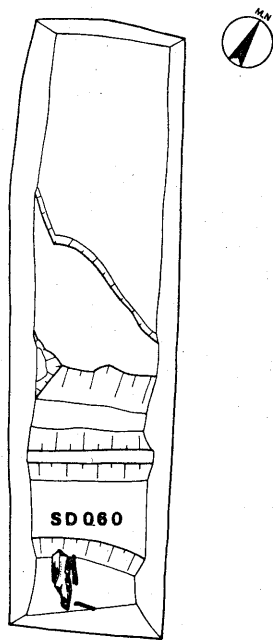
2 第7次調査

第7次調査は住宅建設に伴う事前調査である。調査地は国鉄鹿児島本線の水城駅に通ずる線路沿いに位置し、地番は筑紫郡太宰府町大字吉松字松本 193—5 番地である。発掘地は築堤の内側の荒地約 100㎡で、幅 3 m、長さ 12mの南北トレンチを設定し、発掘調査を行った。その結果、発掘区内南端で溝状遺構と考えられる落ちの肩を検出した。

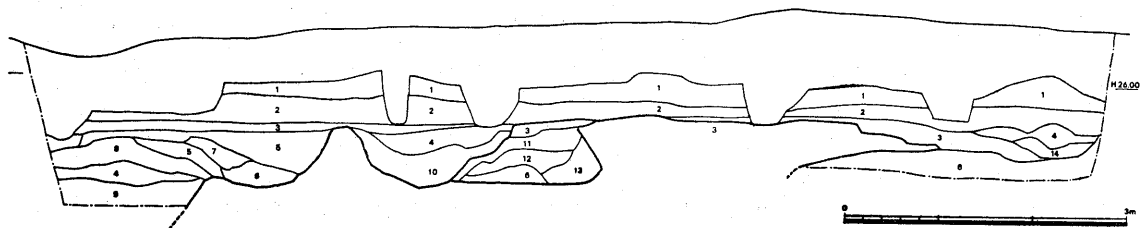
検出した溝状遺構(SD060)の北側の落ちは堤中心部より約58mの位置にあり、台状部とは約2mの落差がある。第6次調査検出のSD055と築堤との距離を今回検出のそれと比較すると、前者は約60m、後者は約58mではほぼ同じ程度の数値をみる。埋土は河砂の堆積が認められ、流木の混在など流れの様相をうかがわせる。調査範囲が狭小であるため深さ、幅等を明らかにできなかった。

ここからの出土遺物は須恵器(高台杯片・甕片)数点である。全形を想定しうるものはないが、高台ないし若干の体部の立ち上がりの特徴から、これらは奈良時代前半から平安時代にかけてのものと考えられる。

このようにSD060は発掘範囲が狭く溝状遺構とするには疑問が残るが、先のSD055との関連からその可能性を考えてみた。その他SD060の北側で幅1.5m、深さ0.6mの東西方向に延びる溝状遺構と、浅い落ち込み等を検出した。前者は灰砂、黒褐色粘土の埋土で溜りの様相がみられ、後者は灰砂の堆積が多く湧水が激しい。いずれも出土遺物はない。後世の攪乱ないし流れと考えられる。



第6図 第7次調査
遺構配置図



- | | | |
|------------------|------------------|--------------|
| ①暗灰色土 | ⑥淡茶灰色砂土 | ⑪灰褐色砂質土 |
| ②黄褐色土(暗灰色のブロック混) | ⑦暗茶褐色砂質土 | ⑫⑬よりやや淡色の砂質土 |
| ③暗灰色砂質土 | ⑧淡茶灰色砂質土(同色の粘質土) | ⑬青灰色粘質土 |
| ④灰色砂土 | ⑨灰褐色砂土 | ⑭暗灰色粘質土 |
| ⑤灰白色砂土(暗灰粘土混) | ⑩黒褐色粘土 | |

第7図 第7次調査土層実測図

3 第8次調査

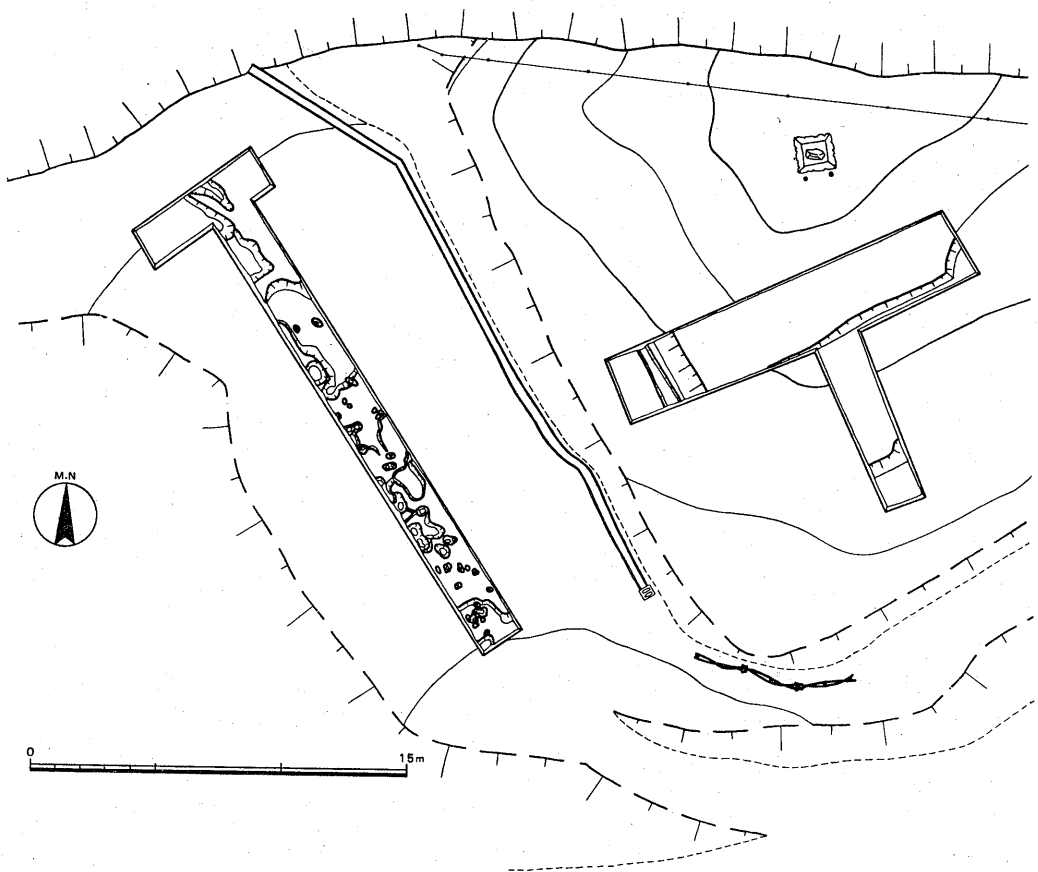
本次調査は、水城跡環境整備に伴うもので、昭和52年7月8日から同年7月23日まで、15日間実施した。

調査対象地域は木樋取水口部分（第2地点）と東門礎の東北方の丘陵上（第1地点）の2地点である。

第1地点の調査

東門跡の大野城寄りの地域で、平坦な地域があること、付近から瓦が採集されていることから望楼等の施設の存否確認のために調査を実施した。

調査はA地点にT字形のトレンチを設定したが、直ぐに地山に達し、遺構・遺物ともに発見



第8図 第8次調査第1地点地形図

されなかった。

B地点にもトレンチを入れ調査を行ったが、近世・近代の遺物を出土するピット群を検出したのみである。

第2地点（木樋取水口部分）の調査

国道3号線に接した地域で、木樋S X 050の取水口部分は $5.25 \times 5.35m$ を測る略方形の石垣に囲まれて保存されている。

木樋の調査は、過去3回実施されている。最初は昭和5年現国道3号線開設時、次いで昭和5年時調査の補足として昭和7年に取水口部分を、そして水城跡環境整備事業の一環として昭和50年の調査（第5次）である。

昭和5年調査の概要

樋は堤に直交し、全長 $79.5m$ を測り、勾配は取水口部分から $63.0m$ までは $1/394$ で、これから吐水口部分までの $16.5m$ は $1/14$ と勾配が急になる。樋の幅は取水口部分と吐水口部分が広く、中央部が狭い。取水口部は縦樋がT字形に直交し、吐水口部の側板は末端から $2.1 \sim 2.4m$ にかけて斜めに切り落とされている。また、樋の周囲を粘土でまいてい

第5次調査の概要

木樋中央部を $11m$ にわたって調査を行った。肩部で幅 $9.0m$ 、下底幅 $5.4m$ 、深さ $2.15m$ を測る掘方の内に樋を入れていた。樋の幅は内法で $116cm$ 、高さは $78cm$ 前後を測る。南から北へ若干傾斜しているが高低差は $1 \sim 2cm$ 程度である。樋内は灰色微砂と荒砂がほぼ互層に堆積していたことから当初の樋内は空洞で、後に水が流れて堆積したものと判明し、昭和5年の調査で考えられた「湿気抜き」という説は覆えされるにいった。

今回の調査は既に発掘された部分の再調査であるため既報告と重複するが、新たな発見も加わったことから、再度報告する。

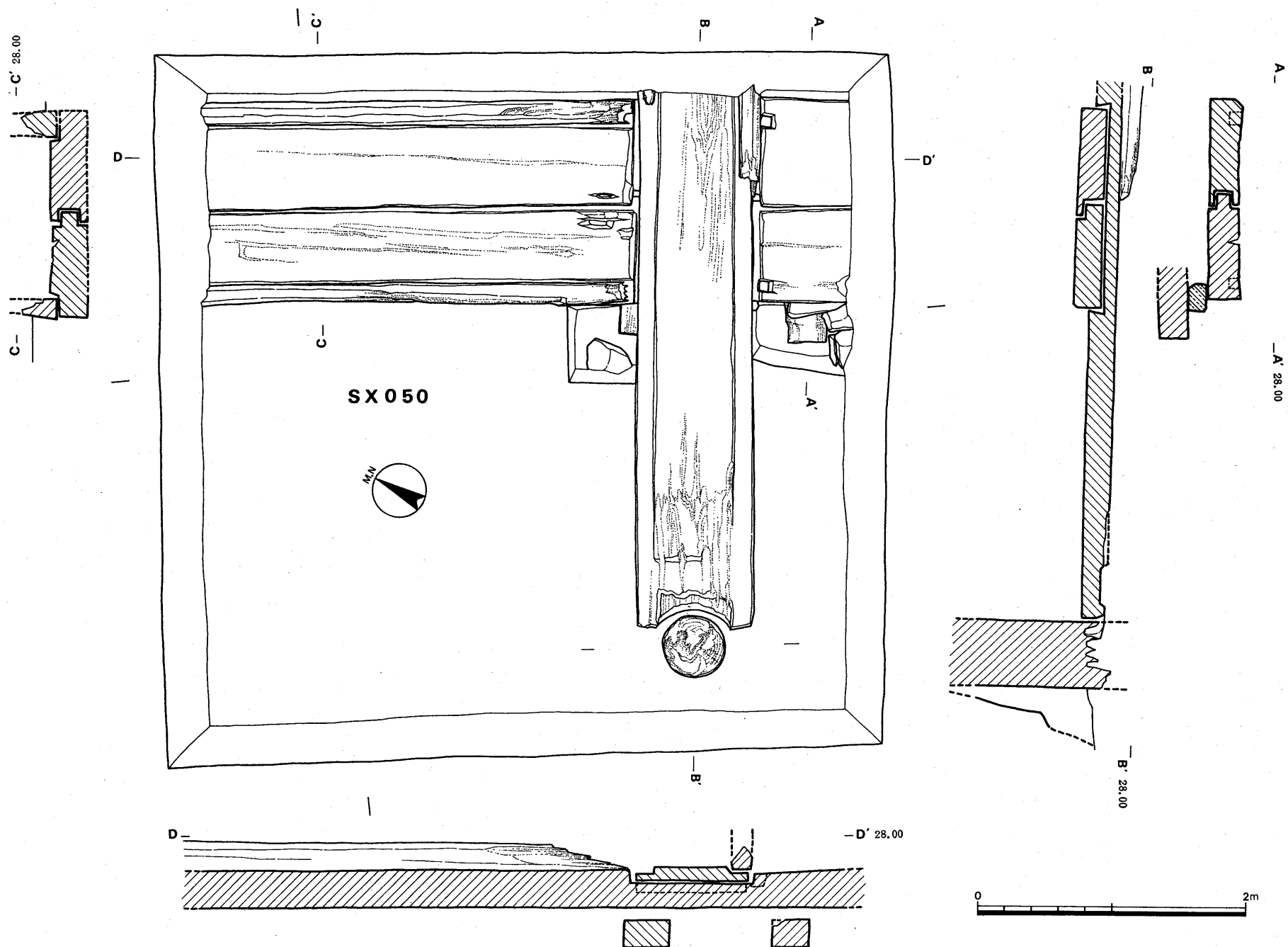
報告にあたって、大堤に交わるものを縦樋とし、それに直交するものを横樋とする。

縦樋

側板の一部と底板を検出した。木樋の方向は磁北に対して $N28^{\circ}5'40''W$ である。

側板は既に、上部が腐植のため欠失し、わずかに底板に接する部分が遺存しているのみである。この底板に接する部分の側板の幅は $17.8cm$ （西側）、 $20cm$ （東側）前後を測る。

底板は2枚を用い、西側の底板の側面に凸、東側の底板の側面に凹を造り両者を接合している。底板の幅は西側のものは $80cm$ 、厚さ $26cm$ 、東側では $80cm$ 強、厚さは石垣のため明らかでない。底板の両側部は側板のために、深さ $6cm$ 、幅 $18cm$ の切り込みを入れている。この2枚の底板と直交する横樋の北側に、向い合ったレンズ状の穴を発見したが、これは昭和50年に発見し



第9図 木樋 SX050遺構実測図

た平カスガイを打ち込んだ痕跡と考えられる。

この縦樋の下に横木を敷き、その上に花崗岩の自然石を置いて樋の沈下を防いでいる。

横樋

横樋は縦樋と底板を合欠きにして組み合せている。

側板は一部しか残存していないが、昭和7年時の所見では「横樋の南側の框の腐蝕は可なり激しいが、それでもその框が樋を通じて存在していた……………然るに北側水城堤防側の框は、縦樋と交錯する部分において……………切り取られた形跡は十分に認められる」とあり、縦樋と横樋は通じていたことが知れる。^(註4)

底板は幅88cm、厚さ20cmを測り、両側に側板を立てるために幅12～13cm、深さ4cmの切り込みを入れている。小口部分には円形のくり込みを入れ、この部分に径47cm、幅6～7cmの面取りをした円柱をたてている。深さ1m程確認したが、地盤が軟弱なため石垣が崩壊する恐れがあり、それ以上は追求しなかった。円柱のための掘方は円形で、上部40cm程は径160cm、それ以下は径74cm程を測る。この円柱の内側底板上に幅20cm、深さ4cmの溝が掘られており、小口部分にも板が立っていたことが推知できた。発掘区全体は茶黒色の粘土と黄褐色の粘土が青灰砂質土の上に敷き詰められていた。

小結

第1地点の調査では、昭和5・7年時の所見以外に縦樋の底板がカスガイで結ばれていたこと、横樋の小口部分に小口板を立てていたと考えられる仕口を発見した以外に構造的な新知見はない。

第5次調査最北端の底板のレベルと第8次調査での縦樋と横樋と接する部分のレベルを比すと、約12.2cmの落差がある。この間は33.87mあり、勾配は1/278であることが知れる。

次に第5次調査と本次調査の樋の寸法を比すと下表のごとくなり、極めて均一に規格された材をもって樋を設置していることが知れる。

	底 板		底板の切り込み		側 板	内 法 幅
	幅	厚	幅	深	厚	
第8次調査	80	28	18	6	20	116
第5次調査	(80)	26	19	6	20	116

第5・8次調査検出木樋計測値比較表（単位cm）

註1 長沼賢海「水城の大樋の調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第7輯 1932

2 註1と同じ

3 福岡県教育委員会『水城—昭和50年度発掘調査報告—』1976

4 註1と同じ

4 第9次調査

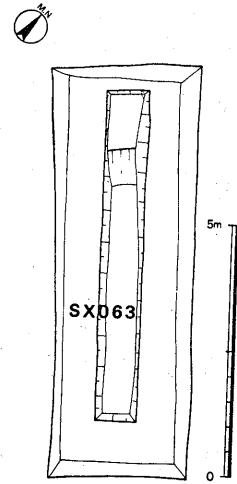
第9次調査は宅地造成に伴う緊急の事前調査である。調査地は築堤西北端部に位置し、大野城市牛頸方向から派生する支脈と連結する接続部の約30m程西側に寄った内側台状部に位置する。したがって堤の接合部に関連した遺構の有無を調査対象とした。地番は筑紫郡太宰府町大字吉松字星ヶ浦475-4番地である。調査対象地約90㎡に幅3m、長さ8.5mの南北トレンチを設定し発掘調査を行った。その結果顕著な遺構は検出しなかったが、築堤の内側で地山の落ちを確認した。調査は昭和53年4月17日～22日まで実施した。

発掘調査した地域は戦時中戦車用の通路として築堤内側を整地され、付近には収納庫があったといわれている。そのため花崗岩パイラン土を約1.8m程盛土されていた。

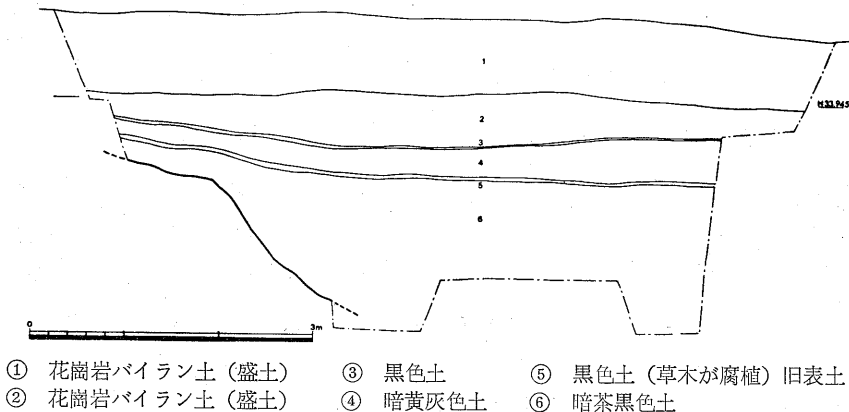
当初目的としていた遺構の検出はできなかったが、築堤中心部より約20m内側で南方へ約50度の傾斜をもつ地山の落ちを確認した。その層位をみると、地表から約1.8mで旧地表面がみられ、その下位の約0.2mの厚さの暗茶黒色土（粘質土）は層中に自然木が埋没するなど有機質を含む堆積層である。

今回の調査は範囲が狭少であり、また遺構面が深く底部の検出には危険をとめない、地表から約3.5mのところまで発掘を断念した。

出土遺物は盛土中から須恵器甕片3点を検出したのみである。



第10図 第9次調査
遺構配置図



第11図 第9次調査土層実測図

5 第10次調査

本調査は、木樋S X 050の取水口部の南に接する地域、約600㎡を対象にして発掘調査を行った。取水口部は昭和5年の調査で判明していたもので、木樋部への周辺から水を取り入れる構造のものと考えられている。このことから、取水部の前面ないし周囲に貯水もしくは水を導くための溝等が考えられているのであり、またそれに関連がある遺構として、昭和51年度の第6次調査では、内側に幅10mの溝が確認されている。^(註1)

このようなことから今回の調査の目的も、この周囲の遺構の状況と第6次調査での溝の延長上にあたることから、その確認を主たるものとした。地番は 筑紫郡太宰府町大字国分字衣掛 221—1番地である。調査期間は昭和53年12月1日～昭和54年1月31日までである。

検出遺構

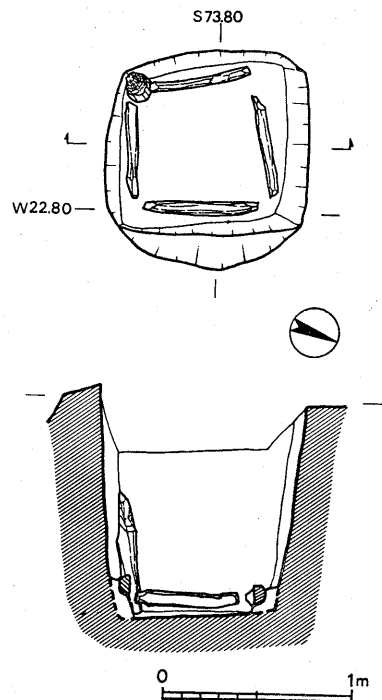
調査の結果、検出した主な遺構は、井戸1と土坑1である。

S E 065 (井戸) 発掘区の西南隅部で検出したもので、隅丸方形の掘方をもち、縦・横1m、深さ1.2mのものである。井戸枠の残存状態は良好でなかったが、底部に隅柱1本と横棧4本が残っていた。柱は径15.0cm前後のもので、その下部に枳穴2個をあけ、棧木を差し込んでいる。棧木は径10cm前後の丸材を縦に半截したもので、先端を削いで隅柱に固定している。隅柱の1本は原位置にあり、また棧木の長さから、約60cmの正方形の井戸と考えられる。枠板は残っていなかったが、棧を有していることから、縦板のものと判断され、この中からは「水城」の墨書銘を有する土師器の蓋が出土した。

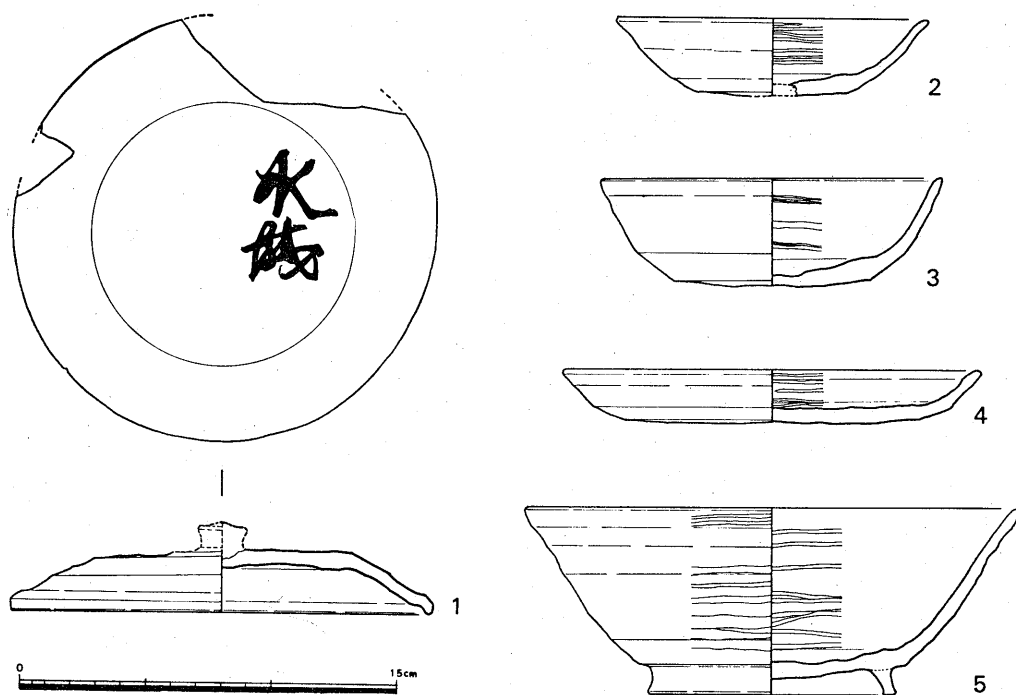
S K 066 (土坑) 径2.0m前後、深さ約1.50mのものである。底部には自然木が残っており、埋土中には、木片が少量ではあるが混在し、埋土の状況から、井戸の掘方かとも思われる。出土した遺物はごく数片で、その中に中世の土師器を含んでいることから、これは中世のものであると判断された。

出土遺物

主に茶灰色土層および井戸 S E 065 中からである。発掘区東半部では上層より①灰褐色土②茶灰色土③灰色粘土の順に堆積して比較的単純な層位をなしている。西半部においては、流れによる層のみだれがみられ、砂、粘



第12図 S E 065実測図



第14図 S E 065出土土器実測図

土が互層になっている。発掘区で普遍的にみられた、灰褐色土および、茶灰色土には遺物の包含が多く、灰褐色土には中世の遺物があり、中世以降のものと考えられ、茶灰色土は、奈良～平安後半のものを含み、鎌倉期以降のものは含んでいない。灰色粘土は、厚さ20cmで、全く遺物を含まず堅くしまったものである。出土した遺物には、土師器、須恵器、青磁、瓦類、弥生土器があり、とくに灰褐色土、茶灰色土それに井戸中から出土した。ここでは井戸出土遺物について記す。

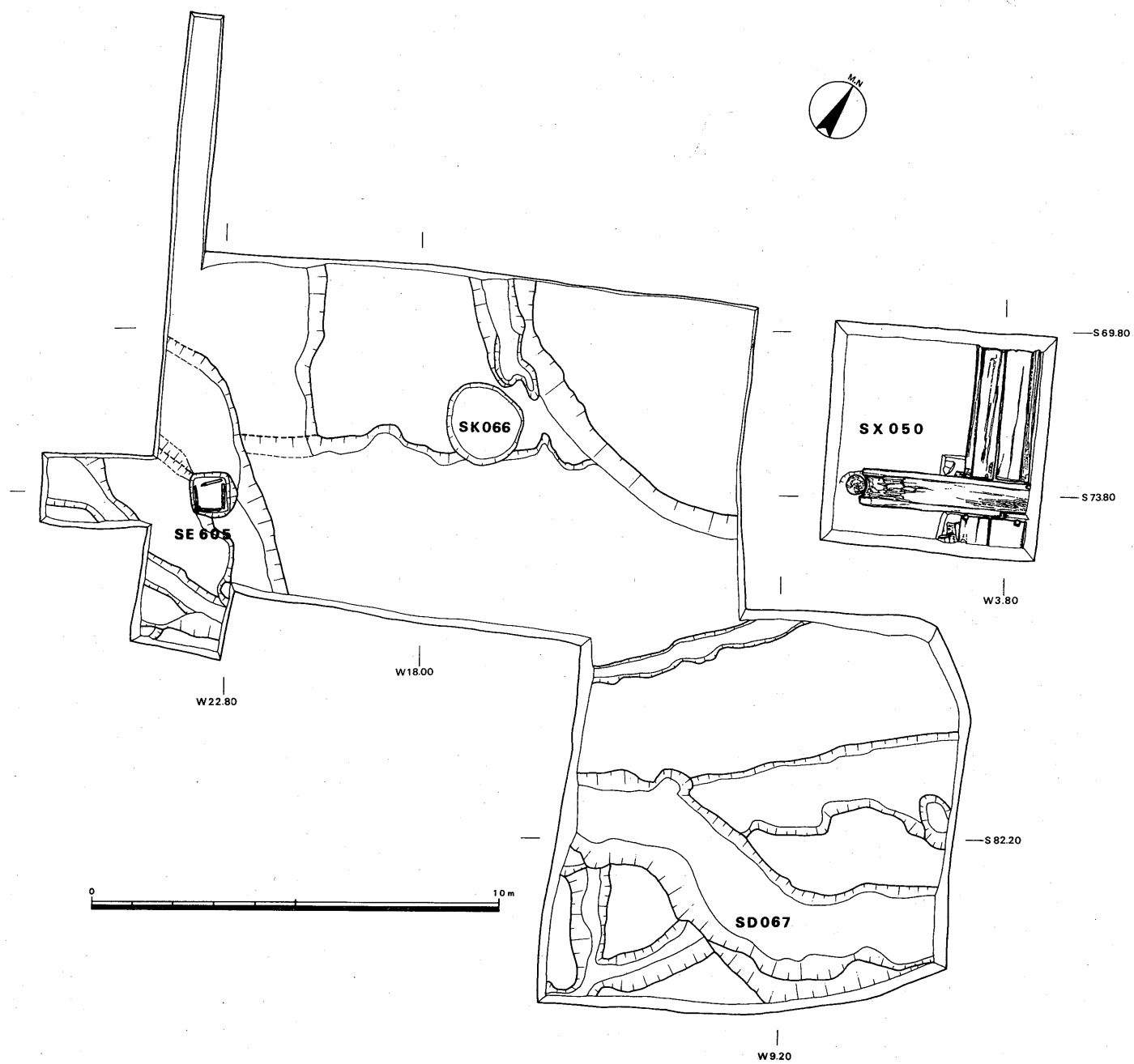
S E 065出土土器（第14図、図版6）

遺物は、土師器の碗、杯、皿、蓋、須恵器の甕片、韃羽口がある。

土師器

杯蓋（1） ほぼ完形に近いもので、つまみと口縁部の一部を欠く、口径16.8cm、器高2.5cmをはかる。天井部は高く、天井部と体部との境が明瞭である。口縁部はわずかにつまみ出し、断面三角形を呈するものの丸くなり、明瞭さを欠いている。天井部から体部中位まではヘラケズリ調整し、体部中位下および内面はヨコナデである。口縁部内面を除く部分は粗い回転ヘラミガキを施している。胎土は精良で硬質のものである。天井部には「水城」の墨書がある。

杯（2・3） 2は復原口径12.4cm、底径6cmのもので、直線的な体部は大きく開き、口縁部はわずかに外反する。内外面ヨコナデで、体部内面は粗い回転ヘラミガキである。外底はヘ



第13図 第10次調査遺構配置図

ラ切り離しのままである。3は法量的に大きく、口径13.6cm、器高4.3cm、底径8.0cmのものである。体部は丸味をもち、前者と同じく内面はヘラミガキし、底部および体部下位はヘラケズリ調整している。

皿(4) 口径16.6cm、器高2.1cmのものである。内面および外面体部中位上はヨコナデで、内面体部は粗いヘラミガキを行い、底部および体部下位はヘラケズリ調整している。内底の中心部はナデ調整している。胎土は精良で硬質のものである。

碗(5) 全形が知れる程の小片で、口径19.7cm、器高7.4cmのもので、体部はほぼ直線的であるが、中位は若干丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。高台は細く高く、断面は四角のものである。体部と底部の境界近くに貼付している。内外面はヨコナデ後粗くヘラミガキしている。胎土は精良で硬質のものであり、暗茶灰色を呈する。

以上、これらの碗、杯等は法量、手法などからみると、大宰府史跡第43次調査のSK1081、SE1084と類似しており、それは奈良時代後半期に考えているものであり、これもその時期に考えることができよう。^(註2)

瓦類

灰褐色土、茶灰色土から、軒丸瓦4点、軒平瓦4点、塼4点、それに縄目および斜格子の叩きをもつ丸・平瓦が比較的多量に出土している。これらはいずれも小片で磨滅が著しい。軒丸、軒平瓦は政庁地域で見られるものであるが、その中の軒丸瓦1点は筑前国分寺から出土するものと類似し、また軒平瓦1点の瓦当面には平瓦の叩きと同じ縄目の叩きを有したものがあ^(註3)る。これらはいずれも奈良～平安時代のものである。

小結

以上、遺構および遺物について、その概略を記した。当初、目的とした取水口部の木樋と直接に関連するような遺構については検出出来なかったが、第6次調査で検出した内側の溝の延長上に南側への落ちがあり、砂および砂質粘土の堆積がみられた。しかし、落ちの南側に奈良期の井戸があり、また貯水的な溜りの状況もみられず、溝と断定するまでには至らなかった。

また、発掘区南端部で自然の氾濫によって出来たSD067溝を検出した。これは幅1.20m、深さ50cmのもので、蛇行しながら東西方向に走り、SE065付近へ流路をとっている。これは地山(花崗岩バイラン土)上にあり、溝中には全く遺物を含まず、その埋土は砂礫のみであった。これらの状況からSD067は人為的なものとは考えられず、自然的な氾濫によって作られた溝であり、遺構とは直接関連しない、かなり古い時期のものと判断された。

次に、発掘区と北側のSA001の台状部との層位関係を把握するため、台状部の一部を切断した。この断面では約1.20mの厚さの互層になった層位が観察された。

既に第6次調査結果では、この台状部の西方部分は版築した積土であることを確認している。第6次調査での積土と今回のそれとは層序および土質の状況に若干の違いがみられる点や

切断の範囲が狭少であったこともあって、やや疑問も残る。

さらに今次の調査で1点の墨書土器が出土した。それは当地方における編年上奈良時代の後半頃に比定される土師器の杯蓋で、文字はその外面右方に記され、「水城」と判読できる。きわめて達筆であり、この筆者はいかにも書き慣れているという印象を受けるが、たとえば「水」字を第2画から起筆しているように、その筆順には現代のそれと異なる点が認められる。

周知のように、水城に関する文献史料は意外に少ないが、『続日本紀』の天平神護元年(765)三月辛丑条に少弐従五位下采女朝臣浄庭を「修理水城専知官」となした記事が見られる。それ自体は単なる人事に関する記事にすぎないが、当時に水城を修理しなければならない事情が存したこと、少弐という大宰府の高官にそれを専当させていることなどは注目される。唐における安祿山の叛乱が伝えられ、新羅を伐つことを計画したり、大宰府も辺戍の不安を訴えるなど、当時の軍事的に緊張した状況をふまえて水城の修理を計画したものであろう。しかしそれが具体的にはどのようなになされたのかは明らかでない。

この墨書土器がこの時の修理と関連するとは断定できないが、時期的にはほぼ符合しており、その可能性を想定することもできるのではないだろうか。ともあれ、水城跡において「水城」と記された墨書土器が出土したことは、奈良時代の後半に水城にかかわる何らかの営為が行なわれたことを示している。

井戸の性格については、それに関連する遺構が検出されず不明であるが、前述の記事とそれに比較的多量の瓦がみられることなどから、この地域および周辺に何らかの施設があったものと考えられる。

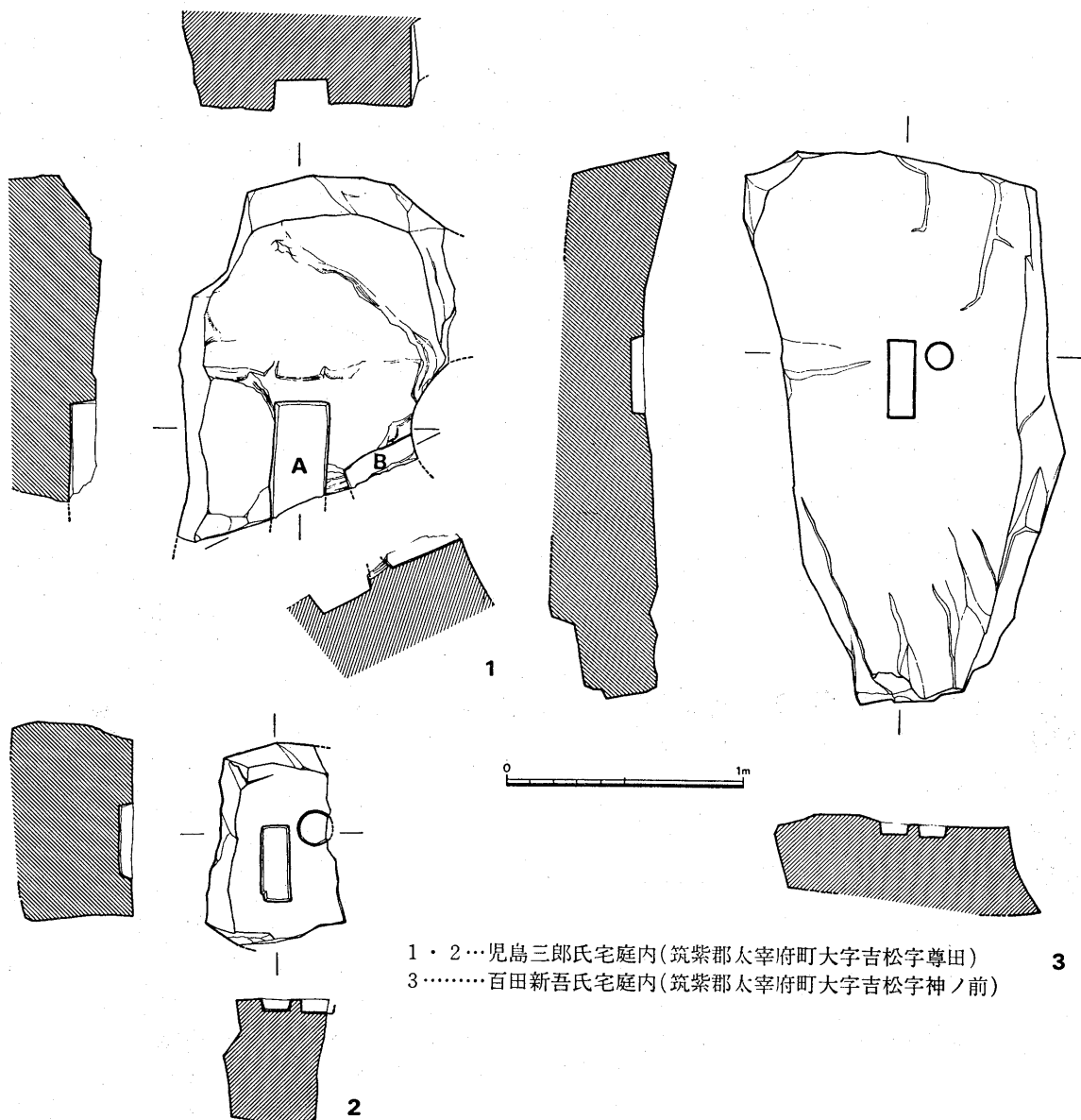
註1 鏡山猛『大宰府都城の研究』1968 風間書房

2 九州歴史資料館『大宰府史跡—昭和51年度発掘調査概報』1977

3 福岡県教育委員会『筑前国分寺—昭和52年度発掘調査概報』1978

Ⅲ 水城の門礎について

周知のように築堤の内外を結ぶものとして、東西の2ヵ所に城門があったことが言われている。即ち、国道3号線と吉松星ヶ浦の町道によって分断された個所である。現在東門推定地には門礎1個が保存されている。(第16図4)。また、原位置を移動し、当時の記録から水城門



第15図 水城門礎実測図(1)

礎とされるもの4個が近隣の家の庭内に保存されている。

これらの門礎のうち4個については既に紹介され、その構造等についての解釈も試みられている。今回、さらに未紹介であった1個（第15図3）を追加し、再録した。

（註1）

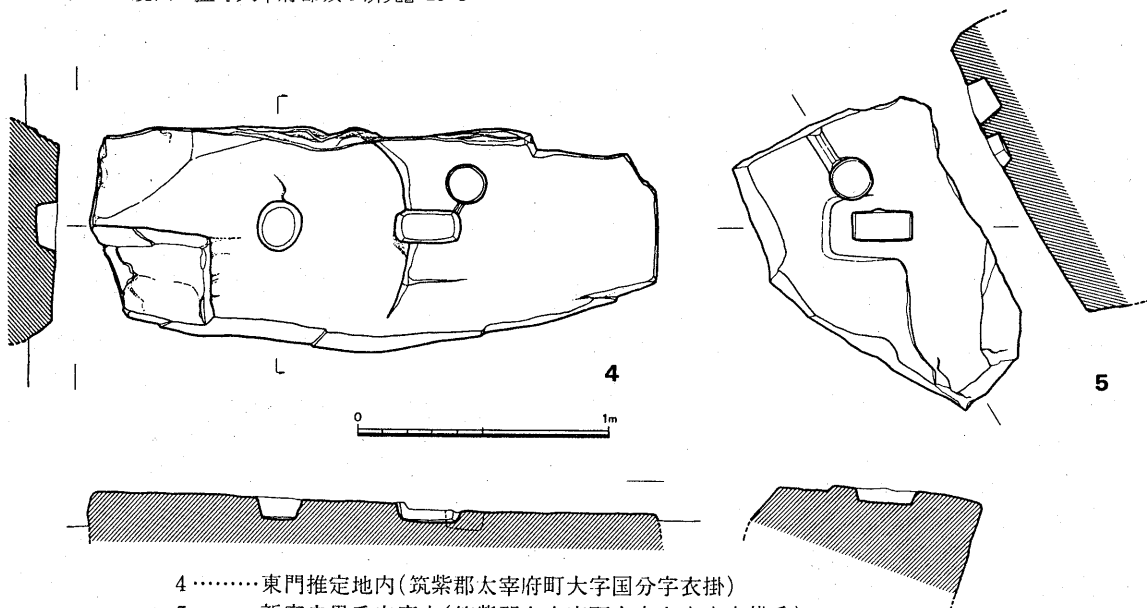
門礎の大きさ、枘穴等の計測値については下表に記した。

各門礎の構造等についての記述は省略し、ここでは二・三気付いた点を若干記したい。礎石の大きさと、その上面のくり込みの位置等から検討してみると、第15図の2と3、第16図の4と5は類似しており、同じ個所に使用された可能性が考えられる。とくに4と5は方立穴、扉の回転軸穴の位置から対になるものと考えられる。4の動不動については明確ではないが、東門礎として使用された事からすれば、5も東門に使用された礎石と考えることも出来る。また2と3の方立穴、回転軸穴は位置的に同じであり、対になるものを考えると、少なくともあと2個の門礎が必要と考えられ、現在その所在については不明である。

（単位 cm）

	礎石の大きさ		柱の枘穴		方立穴			扉の回転軸穴		備 考
	縦	横	径	深さ	長さ	幅	深さ	径	深さ	
1	300	230	無		(A) 48 (B) 33	23 不明	13 7			2面が欠失
2	85	60	不 明		32	13	6	10.4	6	2面が欠失
3	240	140	無		33	12	6	11	6	完 全
4	226	88	16.5	9	25	14	8	15	7.5	完 全
5	130	90	不 明		26	12.5	5	16	9	2面が欠失

註1 鏡山 猛『大宰府都城の研究』1968



4…………東門推定地内(筑紫郡太宰府町大字国分字衣掛)

5…………新家忠男氏宅庭内(筑紫郡太宰府町大字太宰府字横岳)

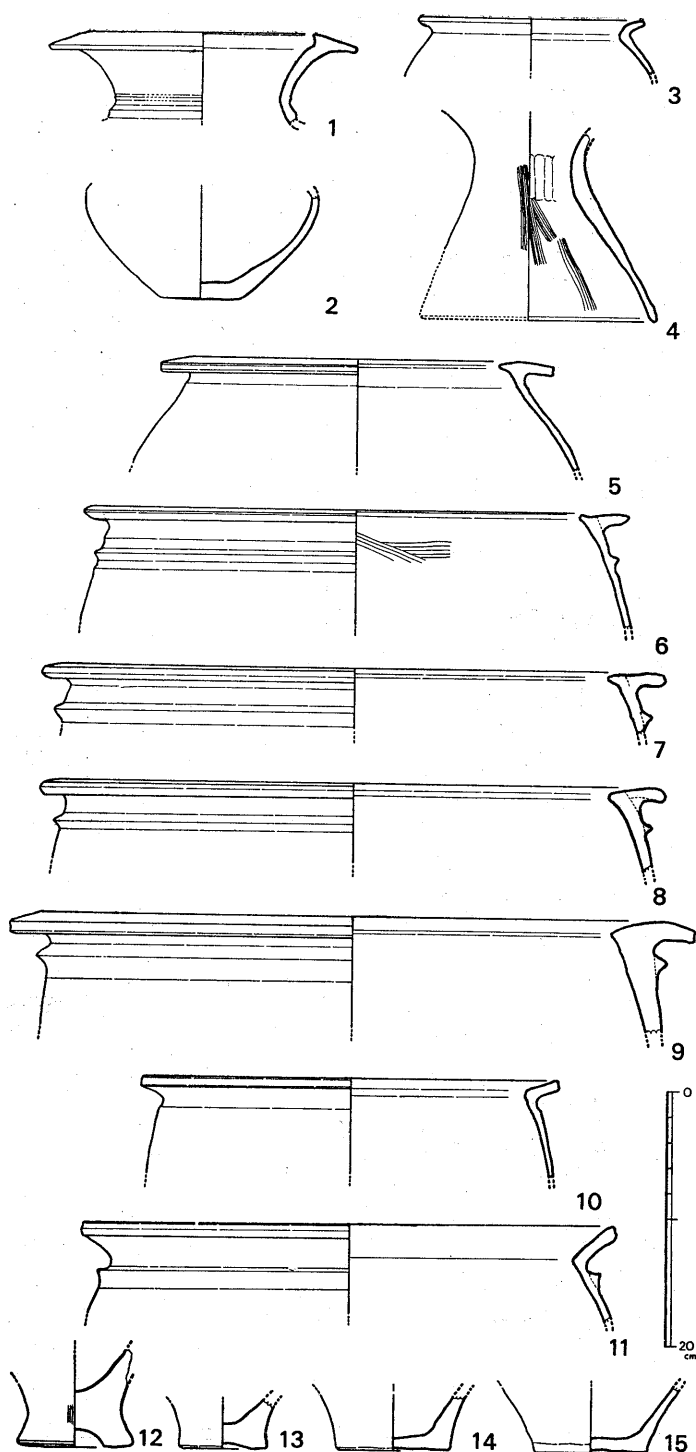
第16図 水城門礎実測図(2)

IV 水城出土の 弥生時代遺物

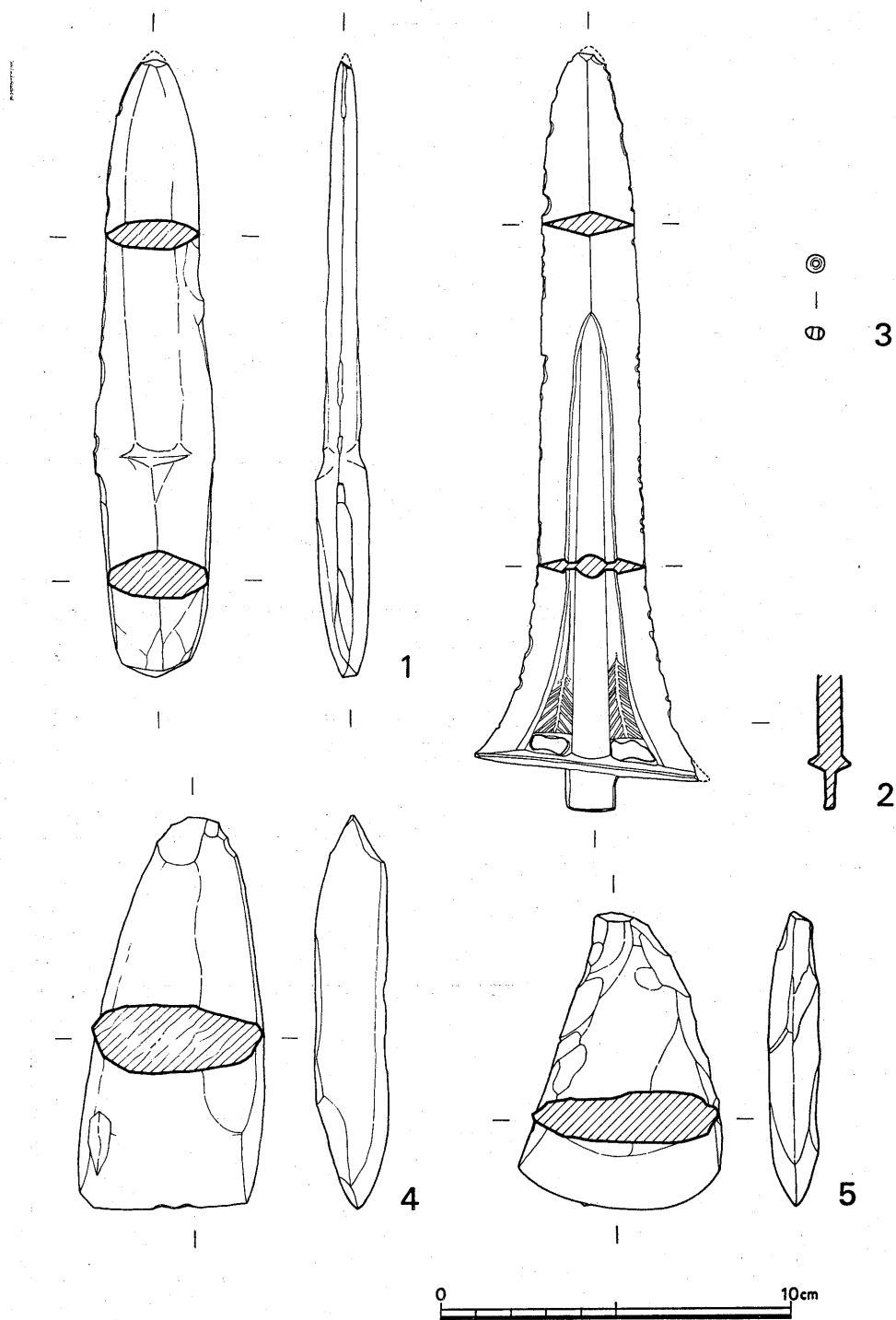
水城の調査では築堤に先行する時期の遺物が検出されている。それらには大甕の破片が多く含まれ、器表面の磨滅・剝落などから二次的堆積を思わせる。これらを甕棺片と判断すれば、水城築堤時の土取りの対象地に甕棺墓地が所在していたことになる。以下第6・10次調査出土の弥生時代遺物を紹介し、若干の考察を加えたい。

弥生土器（第17図） 土器には前期後半から古式土師器まで各時期のものが少量であるが含まれていた。ここでは両次調査を一括報告するが、大甕の類は比較的に第6次調査地に多い（1・6～9・11～14は第6次、他は第10次調査出土）。

1～4は日常器と思われる土器片で、1は鋤先形口縁壺、2は袋状口縁壺、3は甕、4は鼓形器台のそれぞれ一部である。4の器表の保存状態は良く、内外とも指頭による凹凸状の整形痕を刷毛目調整で消そうとしている。1～3は中期後半～後期初頭、4はそれをやや降る時期に属する。第6次調査では中期後半の祭器として知られる筒形土器の破片が出土しており、1



第17図 弥生土器実測図



第18図 弥生時代遺物実測図

- ・ 2 などにも祭器としての可能性が求められる。

5～11は甕棺と思われる大甕で、9は他に比較して器肉が厚い。中期中頃の時期を主として後期初頭におよんでいる。砂粒を多く含んだ胎土を用いる例が多い。磨滅・剝落のため器面調整の知れる例は少ないが、6のように内外とも刷毛目調整を加え、あるいはそれをナデ消していると思われる。

12～15は甕の底部で中期初頭に属する12を除けば時期的に口縁部に対応する。

磨製石剣（第18図1，図版6） 粘板岩質の小形の石剣で、全体に磨滅している。復原長17.9cm，最大幅3.4cm，身部厚1.05cm，柄部厚1.5cm。身部には鑄が走らず，鑄部を扁平に擦り断面を身の薄い六角形に仕上げている。刃部端を削り込んでつくる柄部は背の片面に鑄をつけているため丸味をもった七角形をなす。関部は身と柄の境をわずかに削ってつけている。第6次調査出土。

ガラス小玉（第18図3） 明るいブルーの小玉で，直径5mm，厚4mm。第6次調査出土。

磨製石斧（第18図4・5，図版6） 4は玄武岩質の両刃石斧で，両側面に敲打調整がみられるが，器表の磨滅で研磨痕を認めることはできない。5は砂岩製の両刃石斧で，側面付近に打裂痕を残しつつ刃部などを研磨した半磨製品である。4は第6次，5は第10次調査出土。

水城東堤部から出土した甕棺とみなされる大甕や祭祀用土器，磨製石剣，ガラス小玉などから，先述したように，築堤時の土取り対象地に甕棺墓地が所在したとの推定は可能である。

水城付近には甕棺墓地が一ヵ所所在している。^(註1) 東門跡の西南約200m，衣掛天満宮の背後の丘陵先端部（第1図A）がそれで，弥生時代中期の甕棺片や箱式石棺棺材が散布している。また東堤部の端は丸山と通称される丘陵へと連続しているが，第8次調査地のさらに東側（第1図B）で約10年ほど前に銅戈1口が採集されている。^(註2) 銅戈（第18図2，図版6）は復原長22.1cm，断面部で身厚0.7cm，関部復原長6.8cmをはかり，岡内三真氏のⅢ6口型式に相当する細形銅戈である。^(註3) 樋中の綾杉文は磨滅しており，さらに数を増すと思われる。土取り作業現場での偶然の採集であるが，甕棺片などの散布は知られていない。しかし既応の細形銅利器の出土状況からみて墳墓副葬品の可能性は強く，この地点もまた墓地の候補地となる。

付近には土取りに関する伝説の残る「ひともっこ山」も所在（第1図C）しており，^(註4) 水城の東堤部の築造に要した大量の土砂を大野山西麓の丘陵裾部に求めたことは想像に難くない。東堤の基部をなす丸山は丘陵先端が築堤と相似した形態をなし，第8次調査時の所見でも現表土の直下は地山であるなど，土取りを兼ねての丘陵の整形の可能性がある。こうしてこの付近からいくつかの弥生時代遺跡が土砂とともに姿を消していったと推定される。

註1 鏡山猛・波多野院三氏調査。

2 飯塚市栗崎正勝氏の採集になるもので，氏には種々の御教示を得た。観世音寺保管。

3 岡内三真「朝鮮出土の銅戈」（古代文化25—9）1973

4 藤田敏彦『太宰府の伝説』1978

V 環境整備事業実施概要

1 国庫補助事業

(1) 昭和50年度事業

- ① **緑化修景工事** 整備対象地は国道3号線と町道に挟まれた三角形の公有地であるが、廃棄物集荷場の感がし、地元史跡関係者よりの苦情の絶えない所でもあった。そこで広場修景を基本においた設計内容で敷地内は盛土、張芝、一部碎石敷とし、道路沿いにはシャリンバイの列植を、また公衆便所設置箇所には隣接家屋への悪臭公害排除と遮蔽を考慮して樹種決定をし配植をおこなった。また隣接山際の公有地は見学者の便を考慮して碎石敷の広場とした。図版7。
- ② **説明板設置工事** 前記広場に「特別史跡水城、説明の大型説明板を設けた。図版7
- ③ **空中写真図化委託事業** 太宰府町は福岡市に近いので都市化現象がますます顕著化しその変貌の様態は目をみはるものがあり、かかる事情から現存各種図面も史跡管理計画・整備基本計画策定にも使用不可能なため新たに図面作成の必要が生じた。そこで空中写真図化による「大宰府史跡平面図、4葉（図化面積2km²）を作成した。仕様は図面縮尺1/1000、等高線間隔1m、図面サイズはB1とし文化財表示には発掘の成果を踏まえて格別の配慮をした。
- ④ **その他の事業** 発掘調査及び報告書作成等。図版7

(2) 昭和51年度事業

- ① **国分側土堤保全修景工事** 整備対象地は3区域に分けられる。即ちA区域……水城築堤の際東の城門が設けられた所に隣接する東端丘陵地で大野城への登り口とも考えられる箇所、B区域……前年度発掘した国道3号線沿いの木樋埋蔵部分、C区域……土堤の南に面した築堤内側台状部分である。

（整備概要） A区域の博多側に面した部分は崖状になっており危険防止のため金網柵を張り、太宰府側の民有地に接する部分については木柵の囲障を設け、丘陵地には鉄筋コンクリートU型側溝と土留竹柵工を所々に設け豪雨時の災害に備え、また斜面はツツジを景観植栽し、丘陵地への農道は道幅が狭隘なため盛土による拡幅をした。

B区域は前年度の発掘調査によって遺構が確認された所で設計上考慮した諸点を挙げると下記の通りである。遺構上端部は現地盤下1.2mにあるが国道3号線に平行して埋蔵されているため土堤内農地への農道とほぼ直角に交わりしかも出入口にあるので、耕作者および土堤散策者への利便を配慮して現地盤に台形断面状の土堤（長さ約40m）を

築き、農道部分に相当する箇所は切通しの形にして模造木樋を両側にはめこむ形にし、断面の大きさを原寸法（推定）で、また材質・仕上げの様を本物に類似させて断面構造理解に便を図った。また土堤より国道3号線への飛出しによる交通事故等の危険性を考慮して模造木樋を真位置より2.5m西側に平行移動させておき、木樋側壁の真位置には目印としてツツジを植栽した。図版7。

C区域の現況は公有化されていない畑が数筆あり、若干凹凸が目立つので測量の結果より縦断勾配を図上推定し横断勾配を含めて雨水侵食防止の点からチェックした上で両計画断面を決定それに基づいて公有地を盛土し高麗芝の張芝・コモンバーミューダの芝種子の吹付けをおこない表面侵食（Seat erosion）・細流侵食（Ril erosion）の防止を図った。法肩には土留竹柵を設けテラス内の所々にはヤマハギの群植をおこなった。

- ② 説明板設置工事 前年度の発掘調査によって木樋遺構が再確認されその構造と断面の大きさも判明したのでその内容理解の手助けとして説明板1基を模造木樋の傍に建てた。
- ③ その他の事業 発掘調査等。

(3) 昭和52年度事業

- ① 国分側土堤保全修景工事 前年度整備に引き続いての保全修景工事で、盛土でもって耕地跡の凸凹を均し、盛土面は野芝を張り水田真上の法肩には土留竹柵を設けた。その際前年度事業の反省に立って（施工直後の長雨によって細流侵食が起り水田への土砂流失と芝種子の流入）、幅1.1m深さ0.4mの土水路と幅0.6m深さ0.3mの土留竹柵水路の2本を下段テラス内に長手方向に引き、また盛土面に対しては芝種子吹付けでなく全面張芝とし、水田への被害防止に万全を期した。図版8。
- ② 吉松側広場修景工事 整備対象地は鹿児島本線に沿って走る町道に面した土堤開削部で民家が在った場所でもあるが、史跡整備の一環として立ち退いてもらった跡地が国鉄水城駅に近い等の理由で不特定多数人により駐車場化してきたので、広場修景を基本にして町道と史跡の境界にはコンクリート緑石の敷設と杉焼丸太・ショートリンクチェーンによる囲障工事をおこない、併せてシャリンバイを植栽した。敷地内は整地の上碎石を敷き法面には景観植栽としてツツジを植え且つ土堤入口には階段を設けた。図版8
- ③ その他の事業 発掘調査等。

(4) 昭和53年度事業

- ① 吉松側土堤保全修景工事 国分側整備と同様に盛土・張芝でもって整備、発掘は末だなされていない点を考慮して現地貌は出来るだけ崩さないことを基本に地元との協議を重ねながら、(イ)水秩序変更による水田への悪影響を考えて雨水の集中化を避け出来るだけ地表水の型で全域に散らすようにし、(ロ)また生態系の急激な変化による悪影響を避ける

点から時間をかけて徐々に整備するように設計をまとめ施工した。

整備面積は2,200㎡で維持管理上から出来るだけ雑草を除去するため約15cmの深さで表土剥きをおこない、その上に20cm高の盛土・張芝をそして所々に階段工とはぎ植栽をした。また「特別史跡水城」の説明板1基を町道に面した広場に設け案内の便を図った。図版8

- ② 国分側土堤保全防災工事 整備対象地は国道3号線寄りの西面した博多側であるが、現況について簡単に記すと異状豪雨時には土堤自体が異状なほど湿潤状態となり水田際の土堤迫出しの徴候が見られ、また土堤に沿う用水路は上水路で狭隘なため水流が速く土堤の横浸蝕・法面の崩壊が小規模ながらも随所に見られ、それらがひいては水田管理上にも影響を与えている状態である。そこでとりあえず土堤保全策として生松丸太及び真竹による土留柵を延長230m 設け法面には野芝を張った。また来年度整備予定地のテラス部分に在るウメノキ30本を花付きのよい反対側（南面）のテラスに移植し広場修景を図った。図版8
- ③ その他の事業 発掘調査及び報告書作成等。

2 県単独事業

遺構の保存・復原等に直接的関係ない事業と活用施設等については県単独事業でもって整備をおこなった。

(1) 昭和48年事業

国道3号線水城交差点との山寄り史跡地を整備し、杉皮葺四阿新築と活用施設としてのベンチ・屑入れ・道標を設置した。また予算残で緑化工事をおこなった。図版7

(2) 昭和49年事業

四阿の傍に「水城全体図」を内容とした説明板1基を設置した。また前年度施工の四阿周辺への植栽は質・量ともに幾分物足りなさがあり、そこで県緑化推進課へ追加植栽を依頼し修景をおこなった。

(3) 昭和50年事業

- ① 公有地がコンクリート基礎の破砕されたものや瓦礫で雑然としていたので、それらを取除く整地工事をおこなった（国庫補助事業緑化修景工事着手前の準備として）。
- ② 公衆便所新築工事 史跡見学者による周辺民家へのトイレ借用が頻繁にあり、また公衆便所を建てて欲しいと地元より強い要望があったので瓦葺補強コンクリートブロック造りの公衆便所を建てた。

特別史跡水城

指定年月日 大正10年 3月31日 (史跡)
 昭和13年12月28日 (追加)
 昭和28年 3月31日 (特別)
 昭和49年 8月10日 (追加)
 昭和53年 3月 7日 (追加)



福岡県教育委員会 昭和50年撮影

史跡公有化状況調べ

54. 2. 14

単位：㎡

	太宰府町	大野城市	合 計
指 定 面 積	80,869	21,469	102,338
買収対象面積	76,134	21,067	97,701
買 収 面 積	51,135	7,720	57,306
買 収 率	66.7%	36.6%	58.6%

整備進捗状況調べ

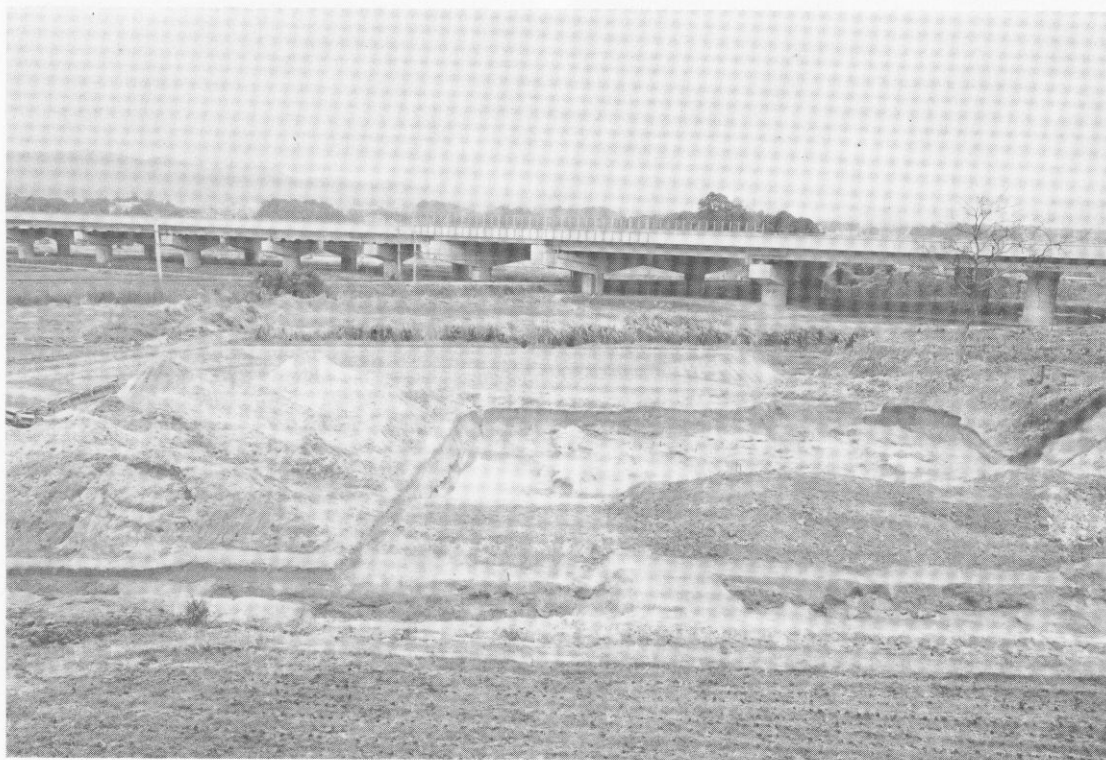
整 備 事 業	
48年度	
49年度	
50年度	
51年度	
52年度	
53年度	
54年度	

- ③ その他の活用施設 公衆便所の周辺に水飲場・ベンチ・屑入れを設置し、また東端土堤の太宰府側下段テラスに焼却炉 1 基築造した。

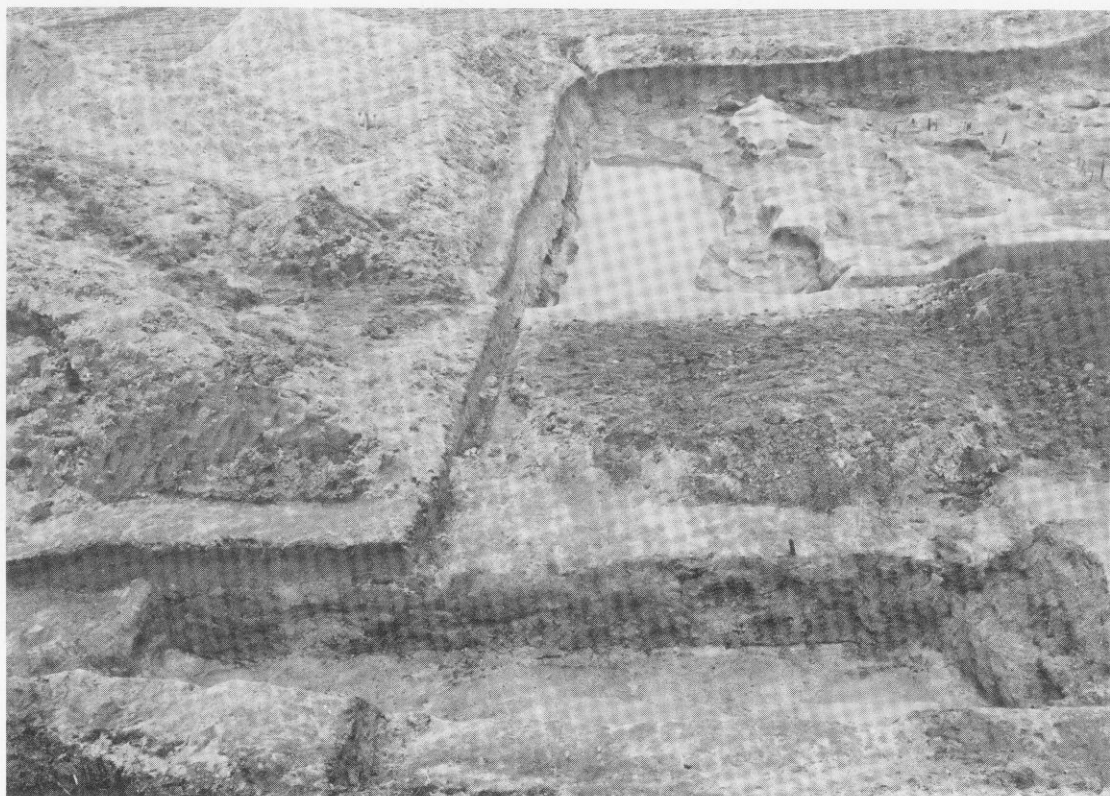
水城環境整備事業総括表

(単位 千円)

年 度	事 業 内 容	国庫補助事業	県単独事業	備 考
48年度	四阿新築工事。四阿周辺植栽工事。ベンチ。屑入れ。道標設置工事。		1,821	
49年度	説明板設置工事。四阿周辺植栽工事（県緑化推進課）。		190	植栽工の工事費省略。
50年度	緑化修景工事。説明板設置工事。空中写真図化委託事業。伐開事業。発掘調査及び報告書作成。 公有地整備工事。公衆便所新築工事。活用施設設置工事（水飲場・ベンチ・屑入れ）焼却炉築造工事。	8,000	3,799	
51年度	国分側土堤保全修景工事。説明板設置工事。伐開事業。	10,000		
52年度	国分側土堤保全修景工事。吉松側広場修景工事。発掘調査。伐開事業。	6,000		
53年度	吉松側土堤保全修景工事。国分側土堤保全防災工事。伐開事業。発掘調査及び報告書作成。	8,000		
計		32,000	5,810	37,810



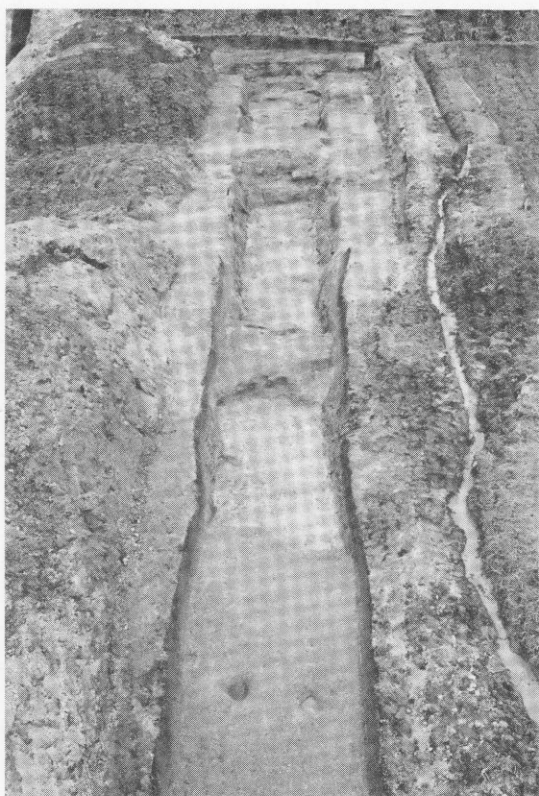
第6次調査地全景 (上)南東から、(下)北東から



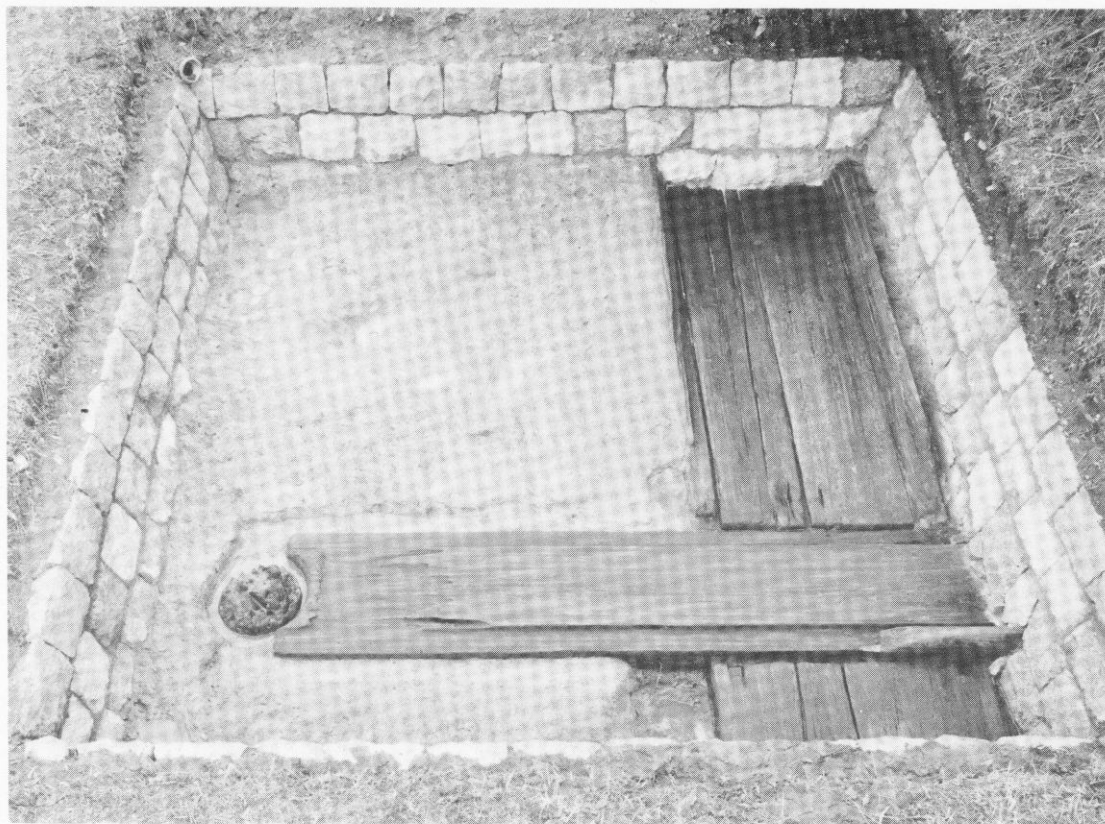
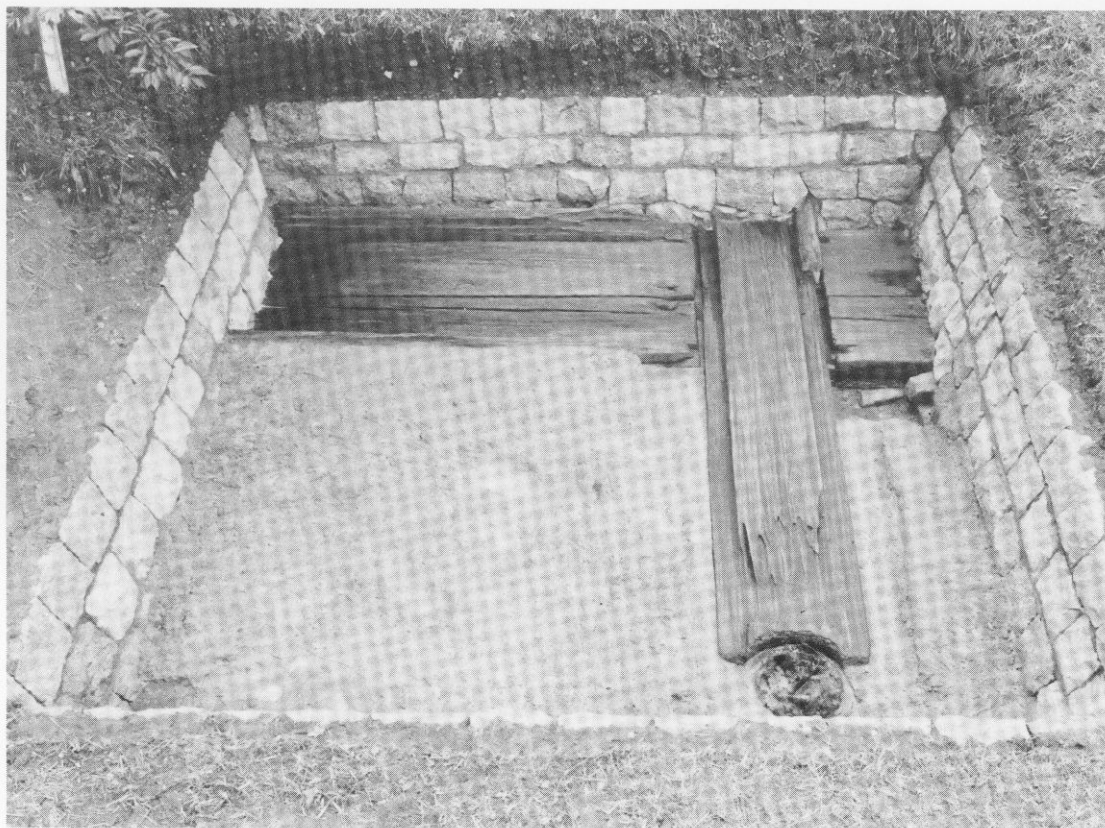
溝 S D 055 全景（北東から）



溝 S D 055 部分



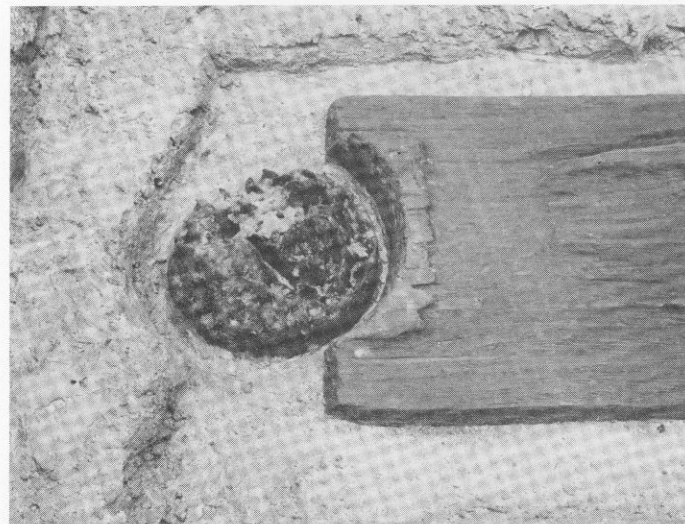
溝 S D 055（中央の凹部）



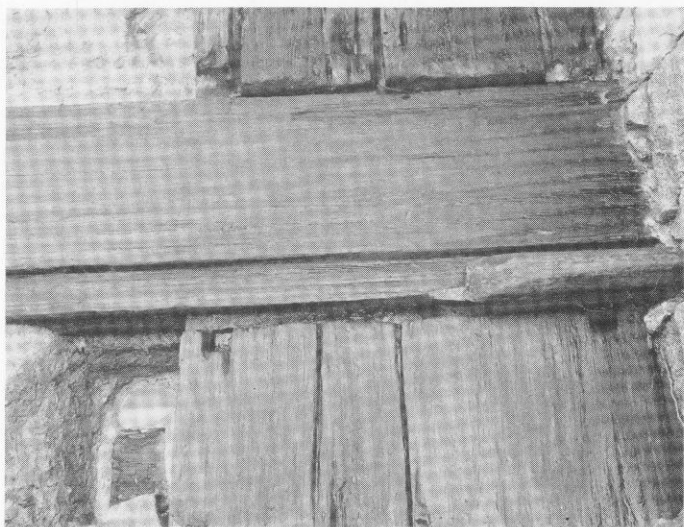
第8次調査地第2地点の全景（木樋S X050取水口）（上）南西から、（下）南東から



木樋 S X 050 縦樋・横樋直交部 (南西から)



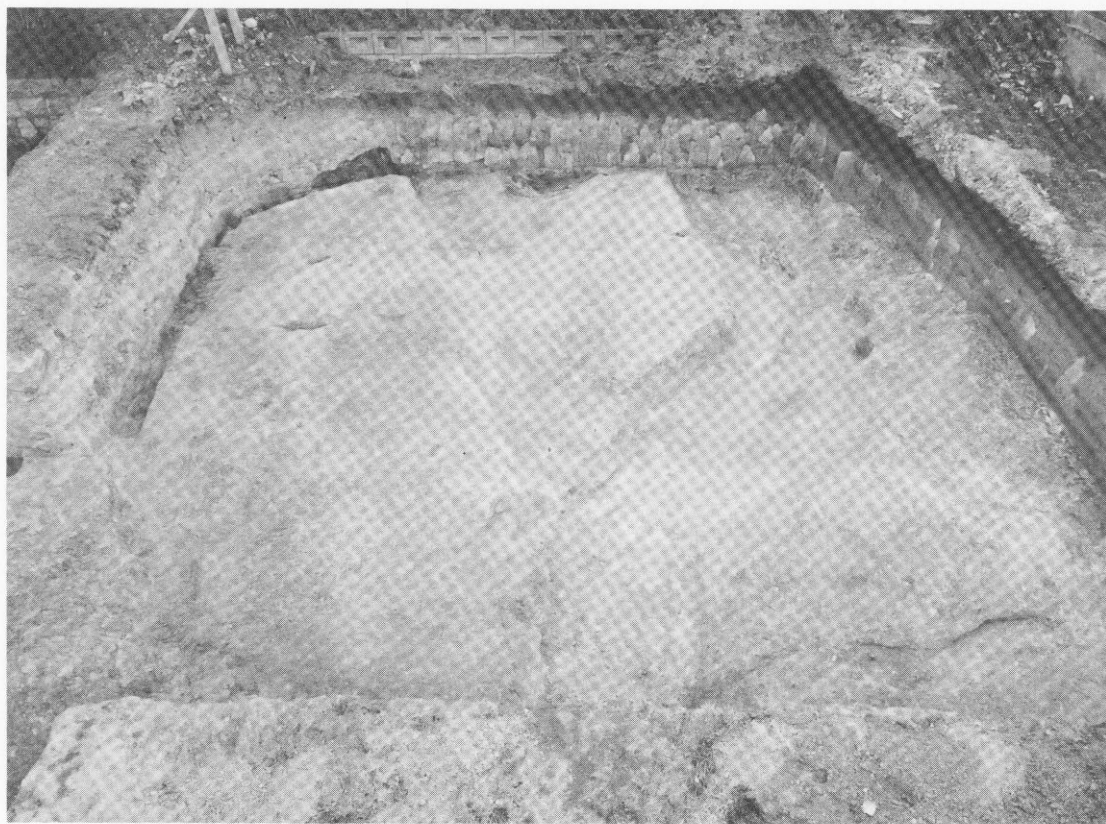
木樋 S X 050 横樋西側端部 (南東から)



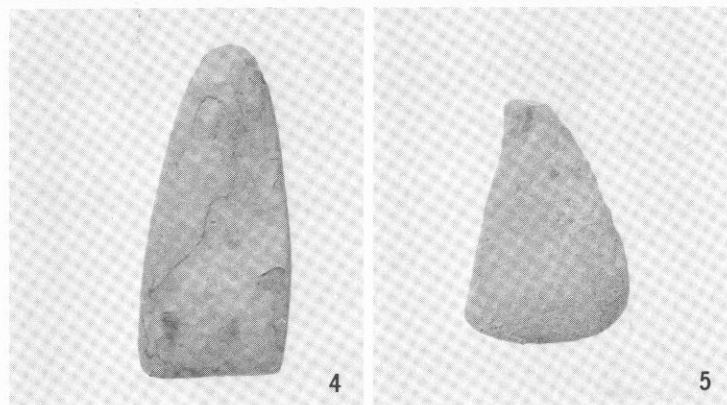
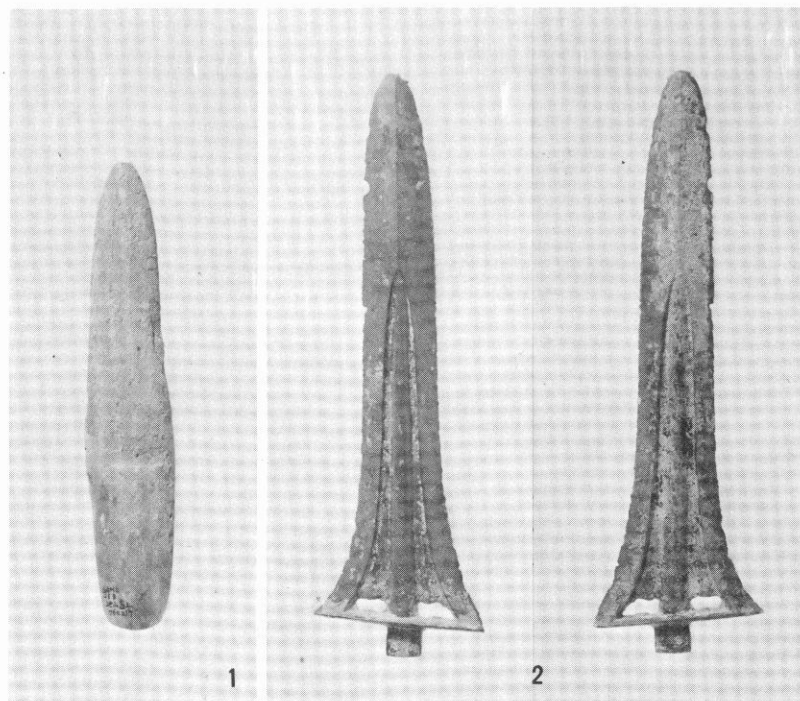
木樋 S X 050 縦樋・横樋直交部分細部 (南東から)



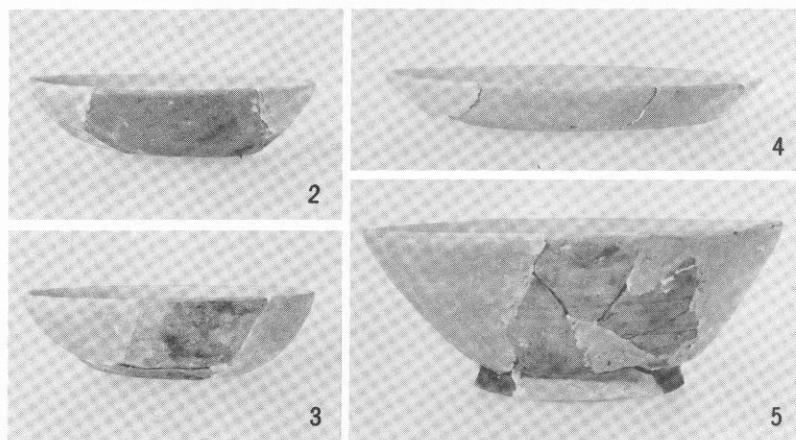
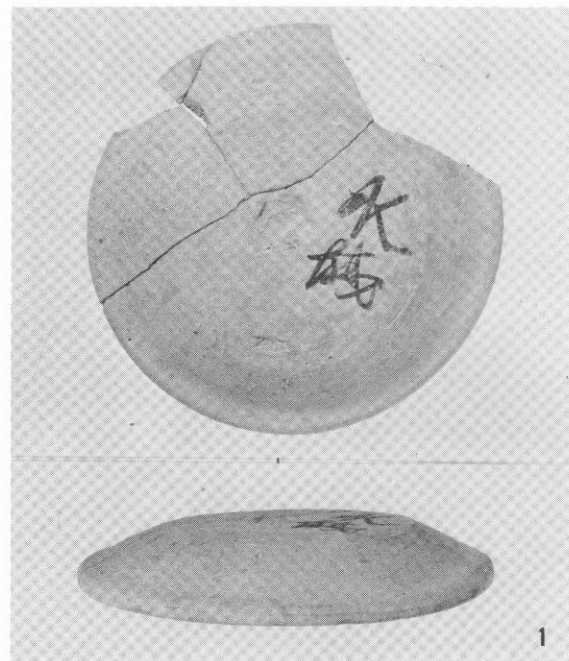
木樋 S X 050 横木および据石 (南西から)



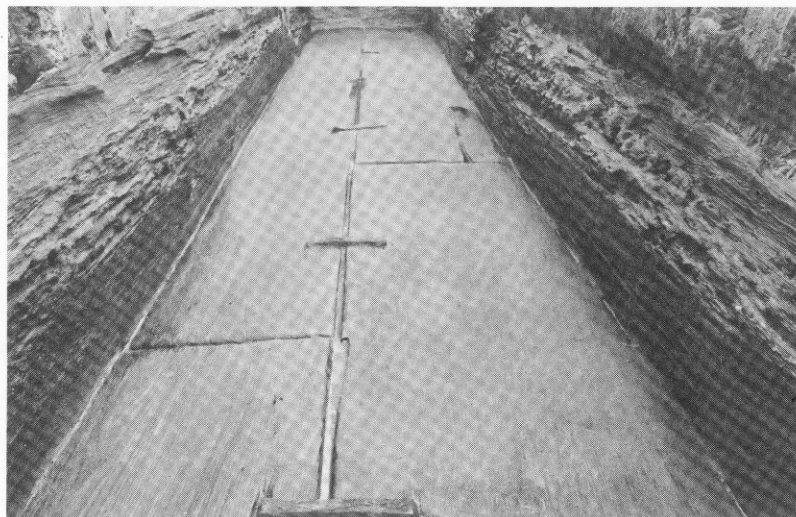
第10次調査地全景（上）北西から、（下）南西から



水城出土の弥生時代遺物



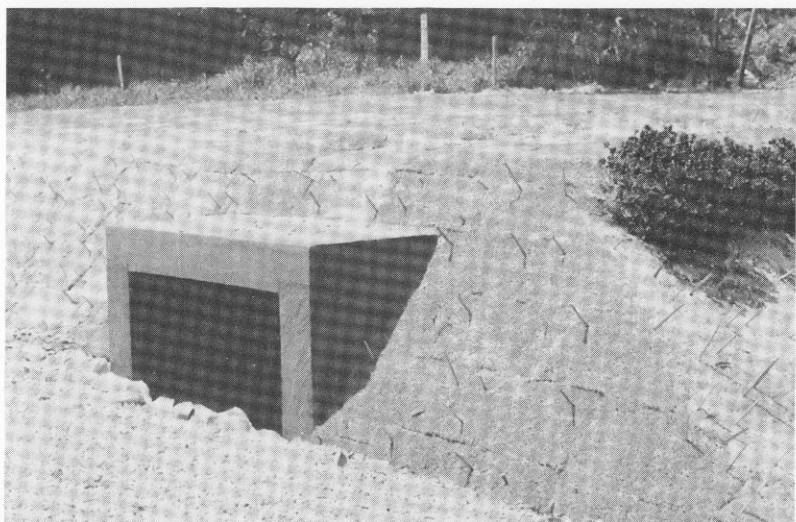
第10次調査 S E065出土土器



木樋の発掘状況



緑化修景、説明板設置、公有地整備、公衆便所新築、
その他活用施設



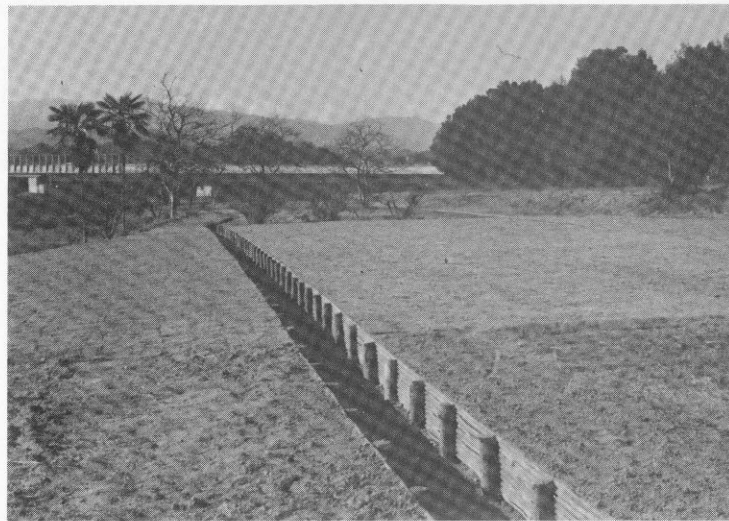
水城跡の環境整備 模造木樋



水城跡の環境整備 四阿新築、説明板設置、植栽工事、
その他活用施設



西堤部（吉松側）広場修景



水城東堤部（国分側）土堤保全修景



水城跡の環境整備 西堤部（吉松側）土堤保全修景



水城跡の環境整備 東堤部（国分側）保全防災工事

特別史跡 水城跡

——昭和51・52・53年度の発掘調査概報と
史跡環境整備事業実施概要——

1979・3・31

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6街区29号

印刷 株式会社 川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目4番地4